
キミがくれた

紗渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミがくれた

【Nコード】

N3509J

【作者名】

紗渚

【あらすじ】

アナタの隣にいる人は、いつもアナタの側にいた人ですか？それとも…

少しだけ、

【1】

あの時の君の言葉

忘れた訳じゃないけれど、少しだけ寄り道して、

いいかな？

「ふあゝ…」

私の名前は

ミクラナノカ

「美倉奈乃香」

この学校に通う中学2年生

今は昼休み。

人はそれぞれやりたいことをやりたいようにする。

私は机に突っ伏して寝ようとしていた。

「奈乃香。起きろ。」

「んー…？」

そこに居たのは

ミヤギトシヤ

「宮城俊哉」

2年になり仲良くなった。彼はクラスメイトだ。

「次、国語だぞ？」

「……………あ」

国語係の私達は

職員室に向かう。

係の事などすっかり忘れていた私に

「アホ」

「うるさい。」

割と直球な俊哉だった。

しかし、そんな彼をけして嫌ではなかった。

人には優しく。誰にでも分け隔てなく接する。

彼には男女問わず誰でもその人間性に憧れた。

彼とは「友達」だ

そして「親友」また私には居る。

「どうにかならへんかな」

「華。」

彼女の名前は

ヨコハネハナ

「横峯華」

綺麗な長い黒髪を後ろで一つにまとめ

黒縁眼鏡がきまっている我らが2組の学級委員。

整った美形の口からでてくる言葉は関西弁が少し混じり、乱暴な口調になる。

「華。なにが？」

「アンタらしい加減くっつけや。」

「また、その話デスカ…」

「ええやん別に」

別に俊哉が好きでもない。だけど、

少しだけ、

それも いいかな

なんて思う

そんな自分がいた。

【NEXT】

少しだけ、（後書き）

ども。紗渚デス

初小説ゝ（パフパフ）

この先どうなるかわかりませんが
キャラと共に頑張ります

皆様よろしく

お願いしまさア（ペコリ）

目を瞑って、

【2】

「奈乃香？」

「え？」

気がつけばそこは職員室の前で。

「早く教室戻るぞ。」

用事も既に終わっていた。

ずっと上の空だった。

それはさっきの華のセリフがどうも気になってしまったから。
いつもなら気にもしないのでそのまま流すのに…。

「…」

ずっと考えていたら

俊哉と2人だということを妙に意識してしまっ

て。顔が熱くなってくる。

鼓動が速くなる。

周りが見えなくなる。

思わず目を瞑って

立ち止まる

「…」

そっと目を開けると。

「!？」

そこには心配そうな顔をした俊哉が私の顔をのぞきこんでいた。
思わず私は俯いた。

「どした？ 具合悪い？」

ああ、これだから彼は憎めないんだ…。

「大丈夫か？」

返事をしようと顔を上げると。予想以上にその顔は至近距離にあった。

「…あっ…」

「え？」

みるみるうちに自分の顔が赤くなるのがわかる。

それと同時に俊哉の顔も真っ赤になる。

「えと…」

その時、なんとなく

自分は彼を好きかもしれない。

そして彼も…。

自意識過剰だと自分でも想う。だけど。

目の前にいる彼の照れくさそうな横顔が

そうだと思わせている。

気がした。

【NEXT】

目を瞑って、（後書き）

甘酸っぱい…

なんか

かいてる自分が怖いわぁ

自意識過剰に目覚める時てたまにありますよね？

あり、ますよね…？

誰かア！

俺に文才をオオオ！！！！

ホントは恋愛もの

見るのも書くのも苦手…

だっってお腹いたくなる…

ツツコミしたくなる…

感想お待ちしてますツ☆

呟く、

【3】

「……」

気まずい…

顔が真っ赤なまま

2人何も言わず

立ち止まったまま

動こうとはしない。

（ああ、もういつその事誰かからかって下さい!!）

この空気に堪えられない

…だけど

2人だけの空間が

なんだか心地好くもあった

「……!」

その時、何か視線を感じた

振り返ってみる

でも、そこには誰もいなかった。

気のせいかと視線を戻すと

彼は少し早歩きで教室に向かっていた。

「あ、まって…！」

私はすぐに彼を追いかけた。追いついても、やっぱり顔が赤くなるだけで。

一言も喋れなかった。

———教室

「おーおかえり奈乃香」

「華ア…」

「なんや…って顔真っ赤やん。どないしたん？」

「華…私…もしかしたら好き…かもしれない…。」

なんとなく呟く。

華はそれを理解したのか

それとも理解できなかったのか…。

軽く流していた。

「……………」

私は少し心地いい気持ちになっていた。

これから起こることも知らずに…。

「潰す…」

【NEXT】

眩く、（後書き）

ども紗渚デス☆

着々と進んでいます。

（´∀`）／～～

最後「潰す」って言ったの
奈乃香じゃないですよ？

あ、知ってる？

……………スイマセン

あー本当、文才が欲しい…

見つける、

【4】

———次の日

「やっぱり無い…」

私は昨日学校に持ってきたはずの
デジカメを探しに朝早くから学校にいた。

あれがないと総合の課題が提出できない…。

「奈乃香？早いなあ。どないしたん？」

「あ、華…おはよ。デジカメがなくなっちゃって…」

「おお、マジでか。ほな一緒に探しちゃう」

「ありがとう」

朝早い華は探すのを手伝ってくれた

「あ、…あったで！！これやろ…これ…？」

「え？どうしたの？あったんでしょ？」

なにやら青ざめたような顔の華

何があったのかとのぞいてみると、そこには

――俊哉

「なに…これ…俊哉？な…んで…!!」

「凄い量やで…」

「違う…私じゃないから!!絶対!!誰が…!!イヤ!!」

「奈乃香、落ち着き!!わかってるから!!」

とりあえず消そう。と華は私を落ち着かせるように言う。
でも。ロックがかかっていた。

「奈乃香。ID違うんじゃないの？」

「だって、誕生日だよ？0205」

何度入力しても”エラー”とでてしまう

一体誰がやったのか…

そうしたってなんで私の？

偶然なんてありえない

私のカメラには

きちんと”美倉”と書いてある

故意としか思えなかった。

「おはよう。2人とも早いね…って？」

「「!」？」

そこには隣のクラスの海晴^{ミハル}ちゃん
すぐに隠そうとしたけど、既に遅かった

「あの…それ…?」

「違うよ!!」

「そやねん! 奈乃香ちゃうで!」

必死に弁解しようとしたら

海晴ちゃんはクスリと笑って

「大丈夫。困ってるんでしょ?」

「え…?」

なんて勘の鋭い子だろうか

「つまりこうゆう事や」

「なるほどね…よし。」

「海晴ちゃん?」

海晴ちゃんは何か思いついたような顔をして

「それ、私が消してきてあげる」

「え!?! そんなことできるの?」

「そういや海晴のパパさんカメラ屋さんやっけなあ」

「カメラ屋さんって…まあそんなもんだけど。」

呆れた声を漏らす海晴ちゃん

そんな海晴ちゃんにカメラを預け安心しきった私。

彼女は自分のクラスにもどり
私は朝のHRが始まるまで
華とたわいのない話をしていた。

「あ、俊哉。おはよう」

$$\left[\begin{array}{c} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{array} \right]$$

「俊……？」

朝の彼はいつもより少し何か雰囲気違った。

――
昼休み

やっと午前の授業がおわり、昼食も食べ終わる

私の昼休みのほとんどは教室。
友達とおしゃべりをしたり、本を読んだり。

そんな昼休みを過ごす。

今日はただ窓の外を眺めながら
ボーっとしていた。

なにもない平和な昼だ。
そう、思っていた。

——ガッシャー！！！！

何が起こったのかは

一瞬

わからなくなった。

【next】

見つける、（後書き）

新キャラ

【玖珠 海晴】

（クス ミハル）

では、また次回お会いしましょう^^

遮る、

【5】

———ガシャーン！！

ふいに私の机が蹴り倒される。

その相手の顔を見て、本当にこの人がしたのか…

心から信じたくなかった。

「……………俊哉…？」

そこには見たことのないような表情の彼がいた。

誰が見てもわかる

その表情は「怒り」だった。

「な、何すんねん俊哉！」

冗談キツすぎるわ！

と、必死にフォローしながらも華は、落ちた教科書を拾ってくれる。

その手を俊哉は不意に握る

「ちょっと、どいてろ」

「……………俊…?」

華は黙ってその場を離れた

いつもとは違う少し低めの声が、彼女をそうさせた。

「お前、これ、」

「…?……………!!」

彼が私に差し出したそれは

正真正銘、私のデジカメ

なぜ? どうして?

それは海晴ちゃんに…

何故、彼の手に?

混乱で頭が回らない

声が出ない

弁解しなければ

口が動いてくれない

きちんと話をさせて

わかってくれるから…

「違…!!」

「なんでだよ…!!」

「話を…」

「……なのに…!!」

「俊……!!」

「もう…」

彼はそうさせてくれない
何度も言葉を遮る

その時だった

「近寄らないでよ。」

ふと、廊下側の扉から声が聞こえた。
その姿に目を疑った。

「でしょ？ 俊哉。」

【next】

遮る、（後書き）

さーて来週のキミくれは？

奈乃香です。

いやゝ冬休みもすぐ終わりましたね。
私はこれからテスト期間に入ります。
皆さんはどんな勉強よ（ry

来週もお楽しみに
ジャンケンポ！（殴ッ

スイマセンでした：orz
すぐ次話投稿します
（へーへゞ

雨が降る、

【6】

「俊哉」

そこにいたのは
俊哉のもってる「それ」を預けたはずの相手。

「海晴…」

「何、まだ信じてないの？」

「でもよ…」

「幼なじみの事。信じられない？」

幼なじみ…。

あ、今気付いた…

私、ハメられたんだ…

「違う、それは海晴ちゃんが、」

必死に言おうとする
でも

「私が悪いことにするの？最低だね。そうでしょ、俊哉？」

海晴ちゃんの本性がどんどんでてくる

「あ…ああ…」

怖い

「信じてよ…」

タスケテ

「違う…」

ヤメテ

「ゴメン…奈乃香…」

「……………!!」

何かが、私の中ではじけた
はじけた糸はそのまま

落ちた

「もう、いいや」

「奈乃…」

ふいに彼は私の手を握る

まだ、仲直りしようとしてくれるんだね

優しいな、俊哉は

だけど、私がやったと思ってるんでしょ？
今、君が握ってる手に
温もりは、ない

「離して」

「俺は…」

「離してよ」

信じてくれないんでしょ？

「あ…」

「俊哉、なんて…」

心とは違う言葉がでてくる
こんな事が言いたい訳じゃない
だけど、胸の中の溢れる気持ちがそうさせる

「嫌い」

「奈乃……………」

「大、嫌い……、ッ」

頬に涙が零れる
走り出す。誰もいない所へ
彼の声が、
聞こえない所まで……

「奈乃香!!どこへ…!!!?」

もう何も聞こえない
華の声も皆の声も

彼の、声も…

「俊哉…アンタ…なんちゅう事を…」

走っても走っても
涙は止まらない
胸の痛みも和らがない

「、そっ、か…」

これが好きってこと

何故こんな時になって気が付いたのかな
どうせなら気が付きたくなかった。知りたくなかった

何故?

何故、今教えてしまうの?
ずるいよ…神様は…

「好き…好き…すき…ッ」

何度、声にだしても収まらなくて

逆にどんどん膨らむ想い

止められない

止まらない

でも止めたくない

「信じ、てよ…ッ」

屋上に

雨が

降ってきた

【next】

雨が降る、（後書き）

どんどん盛り上がってきました（ω、）

でわ次回またお会いしましょう（へーへ）ノシ

まっすぐに、

【7】

雨がやむことはない
ひたすら屋上を濡らす

そして

私の頬も濡らしていく

「もう少しだけ…」

もう、涙は乾いた。と

これは

今、私の頬を濡らすのは雨だと

その場にいることで

私は、私自身をごまかす

そんなことをしても

何も変わらない。誤魔化すことはできない

「わかってる…！」

「わかってる…よ…！」

けど、
そうする事でしか自分を護れなくて
そんな自分が

嫌で、嫌で、嫌で

「ハア…」

ため息が漏れるばかりだった

いつの間にか、雨はやんだ。

「さすがに…戻った方がいいかな…」

立ち上がり、屋上をでようとした

———ガタ…

…誰かいる？

そっと、見つからないようにのぞいてみる

そこには…海晴ちゃんがいた

「海晴ちゃ…」

「…奈乃香ちゃん？」

「いい、気味。だよね？」

「海晴ちゃん…」

少し罪悪感の残る表情
そこから全てが分かった。

「私、奈乃香ちゃんのこと嫌い」
「うん。」

「いつも、ニコニコして…」
「うん」

「俊哉の事…全部しってるみたいで…」
「…うん」

この娘はきつと
少し、寂しかったんだね

でも、いつも傍にいた人がいなくなって
不安になったんだ

でも、

ごめんね。

これだけは、
譲れないんだ。

「私は…ね？俊哉の事が好き」
「……」

海晴ちゃんは何も言わなかった

「でも、伝えるつもりはもうないの。」

「……奈乃香ちゃ」

「だって、俊哉は私を好きじゃない」
「……」

「だから…じゃあね」

扉をあけ、一歩踏み出す

すると、後ろから声がする

「そんなんで…」

「海晴ちゃん？」

「そんなんで…いいの!!?」

「…?」

必死に、

今までとは違う彼女が

必死に私に何かを伝えようとしていた

「相手の都合で自分の気持ち閉じ込めるなんて…」

「海晴ちゃん…」

彼女は少し
落ち着いてから
いつもの彼女のように

「貴女らしくないんだから。」
「！」

「あ、あと「ちゃん」付けもやめてよね」
「うん。」

「最後にいっとくわ」

「なに…？」

彼女は彼女らしく笑い、そして

「私の方が有利なのは忘れないですよ？」

その台詞に
今までの彼女はどこにいったのか
そんな風に思えて

私も涙で赤い目を彼女に
まっすぐ向けて

言った

「望むところ」

【next】

まっすぐに、（後書き）

あばばばばばばば（↑

いきなり海晴ちゃんがいい子にイイイイ…

どうすればいいんだ…

誰かあ、助けてください！！

では、またお会いしましょうノシ

見上げる、

【8】 — 輝side —

——雨は好きだ

その冷たい空気で
心の冷たさを誤魔化してくれる

その止まない音で
余計な事を思い出すことをとめてくれる

——雨は…好きだ

——
——
——
「んあ？」

気がつけば
彼の好きな雨は止んでいた

彼の名前は

ミカミテル
「三上輝」

すらりと伸びた高めの身長

整った顔立ち

誰にでも明るく接する気さくな性格

クラスの…いや、学年の人気者というやつだ

そんな彼は

すでに雲一つない清々しい空を見上げた

「寝てたのか…」

彼はため息を小さく漏らす
むくりと起き上がる

―夢をみていた

―懐かしい日々

―楽しかった思い出

―でも…俺にとっては

「カノン…元気かな―」

彼は懐かしい日々の中に置いてきた想いを

また、

見つけることになる

「∴もう一眠りするか」

彼はまた

懐かしい夢の中に向かった

【next】

見上げる、 (後書き)

輝くん登場☆

ハイ、新キャラでえす

文才ってどうやったらでてくるんすかね？

感想お待ちしてます♪

でわ、またお逢いしましょう(^ _ ^)ノシ

出逢う、

【9】 — 奈 s i d e —

「諦めない…か…」

誰もいなくなった屋上

雨のあとの

雲一つなく

虹のかかった青い空

今から教室に戻る

なんて事できる訳もなく

「このまま帰ろうかな…」

教室に戻ったとしても

気まずいままで

いつか泣き出してしまふ

…そうに決まってる

華には悪いけど

後でメールで謝ろう

今日は、帰る事にした
そう決めて歩きだす

すると、

「サボるのー？」

「……………」

声が聞こえた方を見ると

「あ、…」

そこに、

懐かしくて

大好きな

彼がいた

【next】

出逢う、（後書き）

みじかッッΣ（。Д∴；）

また明日かきますー！。

∴たぶん（汗）

S
a
n
a

分からない、

【10】—俊side—

———教室

『美倉さん…が？』

『やっぱ…修羅場じゃん』

クラスはザワつく

そんな状況も気にせずに

華は口をひらく

「…俊哉、なにをしたか、わかってる？」

怒りに満ちた

友人の声。

華は我を忘れ

いつものなまりはなく

まっすぐに俺に言う

「…」

それに答えられない俺は

ただ、彼女が走っていった道を見つめることしかできないで、いた。

「きこえてる…？」

「…わかつ…てる…」

声を喉の奥から絞り出す

―俺は…分かつてる？

―なら何故、

―彼女は泣いていた？

―俺に分かるのか？

―分からない

―わかりたい…のに

「わかつてる？」

拳を握り震える華は

きつと今すぐにでも彼女のもとへ走り出したい筈。

「なら、奈乃香を泣かしたのは何故…？」

分からないんだ

「奈乃香を信じなかったのは…何故…？」

俺だって

「俺だって…」

「……」

「俺だって…信じてエよ!!」

声をあげると

少し静まる教室

自分でも驚いた

【信じたい】

確かにそう思った

「なら…いや、もうええわ。しっかり考えとき。」

華はそう一言言い、彼女を探しに廊下へ飛び出した。

—信じたい

—…それは

—きつと————

【next】

（彼女の事を…心から）
（愛しいと想ったからだ）

分からない、（後書き）

展開が……（汗）

感想お待ちしております♪

S
a
n
a

ひらり、

【11】—奈side—

ニヤリと笑いながら
ひらりと給水タンクの高さから物音たてずに
私の前に降りた彼。

その顔は忘れる訳もない

「…輝…？」

「久しぶりだね、カノン」

昔と変わらない優しい笑顔でふわりと笑う

「元気…だった？」

小さく私が言うと
彼は

「うん。カノンも…って元気じゃなさそうだな」

彼の長い指先が私の目元に触れる。

彼は昔から私の事を

「カノン」

そう呼ぶ

「だいじょぶ…?」

優しく、優しく

囁くような声で言う。

最後に聞いた彼の声とは違った。

丁度よく低めの、大人の男の人の声。

「大丈夫…だよ」

ウソ。

本当は大丈夫なんかじゃない。

今すぐ逃げ出したい位

苦しい

助けてとすがりつきたい位

辛い

今すぐに抱き着きたい位

泣き出したい

「カノン…」

彼は何か言い出そうとした

でも、私はそれを聞けなかった。

————バンツ！

「奈乃香！！」

その瞬間

屋上の扉が大きく開く

そしてそれと共に

私の親友が走ってきた

「…華…？」

「やっと見つけた……」

息を切らした様子を見ると
走って探してくれた事がわかる

「…ありがとう」

「奈乃香！ほら、帰るよ」

「華…標準語」

「…あッ」

クスクスと笑う

関西弁を忘れる位に
必死になってたんだ

——ありがとう…

私の腕をつかみズンズンと扉に向かい歩きだす華

「…あッ…輝ッ…」

心配してくれたお礼をと
振り向いて見ると

「……………輝…？」

すでに彼はいなかった

「奈乃香？」

「…なんでも、ない」

最後にもう一度
彼の顔が、見たかった

【next】

「ウソツキ」

「カノンの…」

ひらり、
(後書き)

S
a
n
a

悲劇の、

【12】

「失礼しまーす…」

「あ、先生おらんやん」

華は氣を使ってくれて
保健室に連れてきてくれた
そこに先生はいなかった

「あ、美倉サン。」

「!?!」

ベッドのカーテンの向こう側から声がした。

そこには

「亮輔…」

「深井くん？」

同じクラスの
フカイリヨウスケ

「深井亮輔」

俊哉と仲がよく

クールな男の子だ

「何しとんねん亮輔」

「寝に来たんだよ」

深井くんはゆっくりと立ち上がり、私の前に立つ。

「俺。美倉サンに話あるんだ」

「？」

すると、先程までニコリと笑顔だった表情が一変して

「……！」

睨むような目線

「アンタ…最低だな」

「え…」

「…なんて事言うんや!!」

「本当の事言っただけだ」
「……………」

—そうか

—俊哉が傷つくことで

—また違う誰かを

—傷つけていたんだ

「ごめん…なさい…」

「奈乃香！アンタが謝ることちゃうで！！」

私も原因の一つだから

「悲劇のヒロインかよ…ハッ、笑えるな。」

「デメエ…」

悲劇のヒロイン…か

「私にピッタリ…」

「お似合いですよ？」

不思議な会話のなか

私は本当に

何も報われない悲劇のヒロインになったようだった

「じゃあ、ごゆっくり」

「まてや!!」

華は出ていった深井くんを追いかけて行った。

その扉を眺めるしかできない私は、…

悲劇の姫は

今日何度目かの

涙を

小さく

流すのでした

【next】

悲劇の、（後書き）

何この、G U ☆ D A ☆ G U ☆ D A

今度はきちんと整理してきます…（―――）

S a n a

小さく、

【13】

あの日から
何も進展を見せずに
一週間が、たった

先週まで学年中を賑わせていた噂はすっかり無くなり
何事もなかったかの様に、思えた。

だが、しかし
未だに奈乃香と俊哉の間には他とは違った空気が流れ
亮輔もまた、鋭い目付きで奈乃香を見ていた

そんななか、月曜日の早朝
いつもは誰もいない学年廊下に1人の男子生徒がいた
いつもは遅刻気味の彼が何故こんな早くから学校の校舎にいるのか
それは、

誰にも分からない。

分かるのは、彼だけだ

彼が窓際から外を見つめる

その姿は、きっと誰もが見惚れるだろう。

「

」

彼は何かを小さく囁く

誰も聞こえないような

小さな、小さな声で、

少し微笑んだ彼は

一体、なにを想っているのだろうか

それは、

誰にも分からない。

分かるのは――――

【next】

小さく、
(後書き)

S
a
n
a

担任VS、

【14】※ギャグ注意

朝。学校に向かう足取りが重くなる。

いつも1人の通学路がより一層寂しく見える。

学校に行きたくないと、

奈乃香は刹那に思う

もう、誰も奈乃香を責めたりはしない。

だけど、彼と目すら合わせられないのが、
辛かった。

そして、時より見せる亮輔からの冷徹な目線が耐えられなかったのだ。

「と、言うわけで、9月に皆で遊園地いくぞ♪」
「……………ハア？」

朝学活。奈乃香の姿はない
今は、担任からいきなりの報告を受けていた。

「ウチら小学生とちゃうんやで！？なんで遠足やねん！！しかも遊園地！？」

「なんだ？横峯は遊園地嫌いか？俺は大好きだ！」
「知らんちゅーねん！！！」

この担任。

エチゴタママサ

「越後忠正」

いつも陽気な国語教師。

「行きたくないのか？」

「知るか！ガキやあらへんし！！！」

「でもなくただでは行かせられないな」

まったく人の話を聞かず、ただ、ペラペラと1人で話を進める。

「皆が期末で国語平均とれたらご褒美として♪」

「だから…誰もそんなこと望んでなんか…」

その先を言おうとした瞬間

「「越後先生バンザイ！！」」

「!？」

クラス全員が声を上げる。

このクラスはそこまで精神年齢が低いのかと呆れる華

クラスが盛り上がった瞬間

「ちょっと待て」

「「「？」」」」

1人の男子生徒が立ち上がる。亮輔だ。

「今アンタ、ご褒美だと言ってたよな…」

「ああ、言ったぞ？」

フツと笑い

亮輔は続ける。

「つまり。テスト結果で行く遠足なんてな…」

クラス中が、

ゴクリと喉をならす

華はその先何を言うか、予想がついていた。

てっきり自分の意見に加勢してくれるのかと思っていた華は

盛大にため息をついた。

「ご褒美じゃなくて：

『テスト頑張ったね？ご褒美だよ。フッ』

…遠足じゃねえか」

「「……………」」

——知らんわアアアア！！

クラスに沈黙と
叫び声が響いた。

【next】

**担任VS、
(後書き)**

遠足は嬉しいですね？

私は嬉しいですよ？ (↑中2

S
a
n
a

自分に、

【15】 — 奈 side —

「…ハアハア…」

最悪だ…

考え事していたら遅刻…

何だかクラスが騒がしい…

深井くんと…華？

「知つとけよ。『ご褒美だよ』？…明らかに俺達を見下してるぜ。

コイツ。」

「もう黙れやお前！」

「うっせーなあ…ブタ峯」

「ああ！？もういっぺん言ってみい！！」

「ブタ峯ブタ峯ブタ峯。どうだ？満足か？」

「頼むから死んでくれ」

「やだ。」

「大体、気に入らんねん!! 今日だって奈乃香が来てへんのお前のせえやろ!!」

――

私の名前がでた瞬間。
クラスがざわついた

やはりまだ

完全にはおさまっていなかった…か…

クラス全員が俊哉を見る

――――イヤダ

反射的に廊下を走った
屋上に逃げた。

――――バタンツ

屋上のドアを閉める

「ハアッ…」

静かに風が吹いている
とても心地よい

心地よい…ハズなのに…

「あれ…？」

ポロポロと涙が零れる

泣きたいなんて
思っていないのに
何故涙が零れる？

最近泣いてばかりだから
涙腺が壊れたんだ

そう自分に思い込ませ
涙の理由から逃げた

怖かったからだ

その時

「なんで泣いてるの？」
「え？」

ニヤリと笑う彼は
やっぱり暖かくて

安心した。

——なんで？カノン。

【n
e
x
t】

自分に、
(後書き)

S
a
n
a

頼りに、

【16】

「輝…」

そこにいたのは
私の幼なじみ。

「また、泣いてる」

そつと涙を拭き取る
その長い指で

その優しさに今すぐ甘えてしまいたい。

その

—優しさ

—不器用さ

―暖かさ

全てに甘えてしまいたい

だけど…

「だ、大丈夫！目にゴミがはいっただけだから！」

笑って返すと

貴方は少し悲しそうな顔

どうしてそんな顔するの？

貴方を巻き込みたくない

ただそれだけなのに

「私…教室に…」

逃げるように扉へ向かう

すると

彼は私の腕を強く握った

「なんで、嘘つくかな…」

「え？」

小さな声は私には届かない

「俺、今日はやくに来た」

「ど…うして…?」

彼は俯いたままで

強く腕を握ったままで

「なんか、やな感じした」

超能力かと思う位

彼の勘はするどすぎた

「俺は…頼れないの…?」

「輝…?」

「何があってもカノンを信じるから…護るから」

「なんで…」

私がそう言うと、

彼は少し顔を赤くして

「俺が…カノンのこと」

「す「コルア!」」

「「!」?」

後ろを振り返れば、

「ゲッ…吉丘サン…」

「朝からいないと思ったら…輝?」

三組の担任。

ヨシオカアオイ

「吉丘葵」

「ほら、教室行くわよ!!」

「イデデデデ!! 離せェ!!」

そのまま

引きずられていく輝。

不意に握られていた手が、離れる。

(あ……………)

その瞬間

少し涙目の輝は私を見て

「カノーンー!! なんかあったらいつでも飛び込んで来いよー!!」

そう、叫んだ。

ニカッと笑った輝は
昔と何も変わらない

腕に残る温もりに触れると
心まで暖かくなって

安心した

「……………うんッ」

ただ、輝が何を言おうとしていたのか、

何故か、

凄く、凄く

気になった

【n
e
x
t】

（キミの笑顔にまた逢えた）

（キミの本当の笑顔にまた逢いたかった）

頼りに、
(後書き)

S
a
n
a

すくむ

【17】

それは、華の一言から
『勉強しにいかへん？』

「あの…華さん？」

今日は華の誘いから
図書館へ勉強しに来ました

「さん？…なんや？」

ただ勉強。ならいいのだけれど…まさか

「なんであの2人が…」

何故、

俊哉と深井くん？

「最初は俊哉だけやったんやけどな？

亮輔がどうしても言うからしょうがなく…」

気にしないでやろうと華は言うけれど、
そんな事できるわけもなく

どれだけ公式を覚えても
どれだけ計算をといても
全てが抜けていってしまう

「華、おわった…？」

「んー…まあまあ…」

華も珍しく集中していて
妙に静かな空気

「喉かわいたわあ…」

そう言って華は立ち上がり
外の自販機に向かう

「あ、じゃあ私…参考書」

立ち上がり

その場から逃げる

――

「もう、帰ろうかなあ…」

溜め息を一つ漏らし
棚の本に手をかける…

すると

「あ…」

「え…？」

そこには
見たいけど見たくない彼がいた。

「……………」

沈黙がつづく

耐えられなくなってくる

何かいわなくては、と

頭では分かっているのに

口が動いてくれない

「あなさ…」

先に声を発したのは

俊哉だった。

「俺…」

その先を聞くのが怖い

足がすくむ

すると…

「宮城に美倉か？」

最悪のタイミングで
あの人は現れた

【next】

すくむ、（後書き）

キャラ名の真実（▽、）

みんな紗渚の知り合いに名前似てます。

輝に至ってはマンガからまんま持ってきました

（「、□、」＞ヤバイ！！

S a n a

また、

【18】

「え、越後先生…」

そこには、私達の担任。
越後先生がいた、

「こんにちは、越後先生」

私とは違い、さわやかに返す俊哉。
対応力のある俊哉は先生とスムーズに会話を進める

「そういえば、」

「はい？」

ふと、越後先生が何かを思いだしたかのように言った

「2人は、付き合ってるのか？」

――は？

この人は事情を知らない？
噂は教師のもとまでいってない？

「あ、えっと…」

違う、
はっきりと口に出せばいい

だけど

自分の気持ちを否定するみたいで嫌だった

「美倉？」

どこまでも空気の読めない人だと、確信した

「……………」

俊哉の目線が痛い
沈黙がつらい

目尻に涙が溜まってくる

あ、ヤバイ

「せんせー美倉さんは俺と付き合ってるんだ」

ふいに腕をつかまれ
誰かの胸に倒れる

見上げれば…

「輝…」

ニコリと笑う

「三三」

【next】

また、（後書き）

輝くんちよいちよい
いいトコどり
（、△）／こ～

S
a
n
a

ガチャン、

【19】

「三上…」

「こんにちは。俊哉くん」

まるで挑発するかのように輝は俊哉に挨拶する

「なんで…名前…」

そんな俊哉を無視して
越後先生に話をする

「こんにちは。忠サン」

「輝か。先生、だろ」

「気にすんなよ」

まだ私は輝の腕のなか

暖かい

触れてる部分が

妙に熱いのは…何故？

「それにしても美倉…」

先生が何かを言おうとして私の方をみる、

しかし次に聞こえた声は、

先生とは違う方向から聞こえた。

「三上と…付き合ってたんだな…」

「…俊、哉…？」

何か、

思い詰めた様な表情

何故、

そんな顔をするの

何故、

そんなに悲しそうな

ヤメテ、

嫌な期待をしてしまう

ヤメテ、

もう叶わないと

自分に、

言い聞かせて来たのに

「俺…帰る…」

私から離れていく

その愛しかった背中

それを見たら

何かが壊れる

———ガチャン

音がする

決意が壊れていく

音がする

———ガチャン

———ガチャン

輝の腕から
その場に崩れる

「カノ……………!？」

驚く彼が抱き寄せる

何かを必死に話す
彼の声は聞こえない

何も聞こえずに
ただ溢れる気持ちを

「好きッ……………」

「カノン……………」

溢れていく気持ち
止まらない、止まらない

「俊哉…」

輝は俊哉を追いかける様に走っていく

それまであった

彼の温もりさえもなくなってしまい、

余計に涙が溢れてくる

「俊哉……………」

………輝ッ」

何故、

今、彼の名前もでた？

わからない

わからない

自分のことがわからない

「タスケテッ…」

また、何かが、壊れる

【next】

——ガチャン

ガチャン、
(後書き)

S
a
n
a

醜い、

【20】 一輝 side 一

何をうぬぼれていた？

彼女を護ると言ったのは

誰だよ

「…んだよッ」

いつまでも彼女の隣にいて、誰も何も言わないと思っていた。

それが、彼女を護る一番の方法だと思っていた

なのに

彼女の一番の幸せを今、
奪っていったのは誰だ？

紛れもない
この、俺だ。

「俊哉：どこいったんだ」

アイツはきつと彼女のことが好きなんだ。

わかるさ

何故なら俺も

彼女が好きだ、から

でも

そんな愛しい彼女の
笑顔を見たい？

見たいなら何故壊した？

もしかしたら：

分かってたのかもしれない

彼女が：俊哉のこと
好きだったこと

俺がそれに
目を背けて

：イヤ、違う

いつでも俺は
心の片隅で二人に向かって
思っていた

———壊れろ、と

醜すぎる嫉妬だ

結局、俺は
彼女に何もしていない？

あの日、屋上で逢い
久し振りだと言葉を交わした。

俺にとっては
久し振りでもなんでもなかった

いつでも彼女の隣にいるつもりだった

「なら………」

いっその事

このままにしてしまおうか

彼女を俊哉にとられることもなくなる？

俺だけに、笑顔を向けてくれるのか？

「バカじゃねえの……」

俺が望んでいることは
そんな事じゃない

俺が望んでいることは……

「カノンが幸せである事」

さあ、彼女のために
走りだそう

大好きな

愛しい、愛しい
彼女のために

「ただ…」

その努力を見ている
そんな神様がいるのなら

「チャンスの一つくらい」

貰ってやるよ

結局は俺だって
どうしようもないくらい

彼女が好きなんだ

「今、いくから」

【next】

醜い、（後書き）

輝をひいきしちやいそうで怖いなあ…

次は華も目立ちます

親友だからこそその願いもありますよね

私のなかの華は頼れる大親友です☆

S
a
n
a

沸き上がる、

【21】—華side—

「輝も俊哉も…」

外で缶ジュースを飲んでいた。するといきなり飛び出してきた俊哉。そしてそれを追いかける様に飛び出してきた輝。

「何があったんやろ？」

空になった缶を屑入れに投げ入れ、親友のもとへ戻る。しかし、先程まで彼女がいた場所には亮輔しかおらず、亮輔に聞いたところで返事はないと分かっていたから私は広い図書館の中で奈乃香を探しに行く。

「奈乃香？」

ふと、奈乃香の声がきこえた気がした。

その場を覗けば

「やだあ……ッ」

泣き崩れる親友の姿があった。

「奈乃香ッ!？」

すぐさま駆け寄る

奈乃香は小刻みに震え

何度も何度も、同じこと繰り返し言っていた

「置いて……いかないで……」

ふつつつと、何かが沸き上がる感じがする

「あの二人……何……した」

私は優しく奈乃香に声をかける。傷つけないように

「奈乃香? 私、ちょっといつてくる。」

「華…イヤ…」

「大丈夫、すぐ帰ってくるから。待ってて。ね？」

そう言うと、奈乃香は小さく頷く。

———待ってて

拳を握りしめ

あの二人を追いかける。

何をした？

二人は私の大切な子に

泣かせるような

ことをした？

許せる訳がない

誰にも替えられない

大切な私の親友

傷つけるなら近付くな

「なんで……………」

何故、奈乃香が傷つかなければならない？

普通に学校生活をおくり

友達をつくって

好きな人をつくって

誰にでも優しく

明るい奈乃香が、

———何故？

「神様」

もし、アンタがほんとにいるというのならば、

本気で恨んでやる

もし、アンタがほんとにいるというのならば

何故、彼女を不幸にする

「どうして…」

今は、走ることしかできない。

私は奈乃香にそれくらいしかできないんだ

どうか

私の親友の

幸せを

――邪魔しないで

【next】

沸き上がる、（後書き）

いつの間に

越後先生はいなくなっただんどうね？

（、∇、）／～～（↑

S
a
n
a

強敵、

【22】

「どこ…」

見慣れた町並みを走る
全ては大切な親友のため

二人を見つけたらすぐに殴りとばしてやろう。

私は強く拳を握りしめ
全速力で走る

どんなに苦しくなっても止まるもんか。
二人を見つけるまで、

「ハア：ハア：」

こんなに小さな町、
一体二人はどこに行っただろうか？

ふと馴染みの公園を通りすぎる、すると

「…いた」

すぐに怒鳴りに行こうと決めていた体は、何故かくると反転して
いつの間にか私は木の影に隠れるようにしていた。

「三上：さ」

二人の会話が聞こえてくる
私はそれに耳を傾ける

「俺と奈乃香のこと、知ってるのか？」

「そりゃ、ねえ」

もちろんあの事件のことだ

「俊哉くんって…」
「？」

「カノ…奈乃香のこと好きなんですよ」
「！？」

いきなり確信をついてくる

「その反応は、凶星？」
「よく…わかんねえ」

「へえ…」

二人の間に少しの沈黙

「三上こそ、そうなんだろ」

確かめるように言う俊哉
それに輝はニコリと笑い…

「好きだ」

「…」

「お前みたいに甘い考えでカノンを好きじゃない」

先程までの爽やかな笑顔は消え、真剣な眼差しで俊哉を見る

それに圧倒されたかのように黙りこむ俊哉

「カノンが…」

苦虫を噛むような表情をしたあと、輝は自重気味の笑顔を浮かべ

「誰が好きでもいい」

「ただ、彼女を護りたい」

一言も発しない俊哉

どちらの勝ち？

そんなもの一目瞭然だ

「だから…」

—早く気づけばよかった

—そう、思ってる？

「俺だって…奈乃香が好きだよ。」

【n e x t】

（敵はあまりにも強敵）

（それはどちらも同じ）

決め付ける、

【23】

「奈乃香が…好きだ」

真っ直ぐな瞳で俊哉は輝に言う
すると、輝は口元を少し上げ、ニヤリと笑い

「…言うと思った」

何もかも知っていたような顔

でも、

その表情は少し悲しげで
まるで、違う答えを期待していたような顔だった

「じゃあ頑張れよ」

「三上は…いいのか？」

「何が？」

まるで自分の気持ちを抑えて消そうとするような返事

「奈乃香のこと…」

「言っただろ？俺、カノンを護りたいんだ」

「そりゃ、一番近くにいて護れるならいい」

「お前…」

私は輝の言葉に耳を集中させた

「でも、カノンの心に、俺はいないよ」

今日、何度目かの悲しげな笑顔を浮かべ
黙りこむ俊哉のもとを離れる

「あ、…」

近付いてくる

私はとっさに隠れる

でも

「で、華サンはいつまで隠れてるのかな」

「……………」

気付かれてた…

「聞いてたんだろ？」

「…ごめん」

私が謝ると輝は少し驚いて

「別に謝らなくても」

「…ごめんなさい」

再び謝ると輝は耐えられないかのように肩を震わせ笑っていた

「なっ…!？」

「ごめん、ごめん!」

笑いながら謝ってくる

「じゃあ、俺のこと応援してよ。そしたら許す」

「は？でも、輝は諦めるんとかやうんか？」

さっきの会話からして

明らかに輝は奈乃香のことを諦める、ということになるはず。

輝は悪戯っぽく笑って

「諦める、なんて一言も言っていないけど？」

「アンタって奴は…」

でも、その後すぐに輝の表情は少し悲しげになる

「カノンが、幸せになるには俺はいらない」

「輝…」

「悔しいけど、できるのは俊哉なんだ」

輝は俯き、拳を握りしめ
そして、その拳を胸にあて

「ただ、少しでも俺のことをみてほしい」

その言葉はまっすぐで

心から彼女のことを想っていることが伝わる

「協力…か」

「ああ」

輝に奈乃香を幸せにすることはできない？
…そんなこと誰にもわからないのに

何故、決め付ける

【next】

決め付ける、
(後書き)

S
a
n
a

弾け飛ぶ、

【24】一輝side—

「決め付けるな…」

「…決め付けてなんか」

華の拳が一層に震える

俺が、カノンの事を諦めるからではない。

ただ、俺が決め付けることで

彼女のことも決め付けられている。

そんな気がしたのだろう

「アンタら幼馴染みなんやろ？なら同じ気持ちかもしれんやんか」

「…んな訳ないよ、

だってカノンが好きなのは……」

『俊哉だから』そう言おうとしたところで言葉は止まった。

それは俊哉を認めたくなかったから、俺に小さな希望があったからだ。そんな自分に苛立つ

「心、閉じ込める気か。覚悟、必要やねんで？」

「…覚悟なんて、遠の昔にできてんだ」

…違う

覚悟なんてそんなものできていない
彼女がいなくなるのは怖い

いつも隣にいたのに
誰よりも傍にいたのに

彼女の心に俺はいなくて

せめて俺の心の中にはいて欲しい
そう想い続けていたら

彼女を忘れることができなくなった

彼女への想いを

捨てられなくなったんだ

「…好きなんやろ？」

好きだ、好きなんだ
どうしようもない位
彼女の事が大好きで
愛しくて

抑えてきた気持ちは
とうとう抑えがきなくなってくる

「自分に正直になれや！」

心の鍵が弾け飛ぶ

—————キンッ

「好きだ……彼女が、カノンが好きだよ!!」

ああ、やってしまった

「言えるやんか」

「華…お前」

最初から彼女の事で苛ついてた訳じゃないのか

頼れる二組の姉さん

そういうことか

彼女の親友は微笑み

「協力、してやるわ」

「…ご自由に」

さあ、彼女のもとに行こう

走り出すと、後ろから大声で華が俺を呼ぶ

「輝ーーーーー!!」

「?」

「お前、奈乃香の事泣かせんなよー!!」

泣かせたらぶん殴ると物騒な言葉を言い放った華に俺も大声で返す

「わかりました！お母様！！お嬢さん必ず護ります！！」

「誰がお母様やねん！」

ニカッと笑い

また走り出す。

風がさっきよりも心地好い今すぐ彼女に会いたい

彼女を全力で護ってやる

彼女を全力で愛してやる

諦めろなんて言われても

諦めてやるもんか

彼女が誰を好きでもいい

俺はカノンが好きだ

後戻りできない

【next】

（後戻りなんて）
（してやらねえけど）

弾け飛ぶ、（後書き）

皆様お久しぶりです

あれ？久しぶりですよね？

輝くんがようやく動き始めましたよ（疲

次回は図書館にいる奈乃香と亮輔の話です

では、また（＾ー＾）／

S
a
n
a

嫌いだ、

【25】 — 奈 side —

——— 図書館

華が出て行った後

私はどうしたらいいかわからず
そのままそこに座り込んでいた

涙が止まらなくて

その涙の理由が分からなくて

俊哉が私を信じなかったから？

輝が私を置いていってしまったから？

どちらでもない

でも、どちらでもある

混乱してどうしたらいいのかわからない

涙は止まることを知らず

ただただ私の頬を濡らしてく

その時、

一番意外だった人が声をかけてきた

「なんで泣いてんの？アンタ」

「…深井君…？」

一番私を嫌っているハズの深井君が
少し焦った様子で私に話しかけてきた

「な、なんでもないの…ごめんね」

「なんでもない？」

深井君は少し不機嫌になった
不思議に思い。深井君を見ると

深井君の口からは

「アンタは嫌いだ。でも嘘をつくのはもっと嫌いだ」

意外すぎる言葉が出てきた

深井君はしゃがんで私と視線を合わせた。

「アンタは嫌いだ。俺の友達^{タチ}傷つけたから」
「うん…」

「でも」
「？」

深井君は少し表情を変えた
それはいつもの冷たい視線ではなく
どこか柔らかくて

「ホントはアンタが俊哉を傷つけたんじゃない…そんな気がしてるんだ」

目を見開いた
深井君は少し目を伏せて

「なあ、ホントの話聞かせてくれるか？」

救われた。
心からそう思った
私は深井君の言葉に
小さく頷いた

そして今までのこと全部を話した
深井君は真剣に私の話を黙って聞いてくれた

泣いていたせいで聞き取りづらい私の話を
最初から最後まで全て聞いていた

「…と、いうわけです…」
「ふうん…」

ただ、私が俊哉の事が好きな事
そして今その気持ちも
わからなくなってきた事は言わなかった

「つまりその…海晴？がやったと…？」
「うん…でも」

海晴ちゃんはもう何もしない
そう言おうとしたところで
深井君の口から恐ろしい一言

「その女…血祭りにあげてやる」
「あの…それは…ちよつと…」

「なんで？アンタ…じゃなくて美倉サンもムカつかねえの？」
「そりゃ…最初はそうだったけど…」

あの日、あの時海晴ちゃんとはちゃんと話した
だから、今は友達になりたい

でも最近海晴ちゃんとは会えていない…

「美倉サンって優しすぎない？」

「え？ そうかな…」

深井君はそういうと
小さく笑い、

「だから、好かれちゃったのかな？」

「え？ なんて？」

「ね？ 美倉サン？」

いきなり笑顔で

私には聞こえない小さな声で呟いていた

「…？」

「だってさ…」

深井君は目線を私の後ろに向けた
何かと振り向いてみれば

そこには

「∴カノンみーつけ」

息を切らしながらも
笑顔でそう言う彼がいた

【next】

（気づいてなかったのは）
（美倉サンだけだよ）

嫌いだ、（後書き）

PCからの更新だと長くなります。；；

やっと展開みせてきたなあ…

長くてスイマセン…

お付き合いくださってる方に大感謝です！

感想お待ちしてます

S
a
n
a

夕日の、

【26】

「輝…？」

そこにいたのは
私の幼なじみ
輝は私に右手を差し出し笑顔で言った

「一緒に帰ろう」

私が深井君に視線を戻すと
「バイバイ」の意味で少し微笑みながら小さく手をふっていた

「…うん」

少し戸惑いながらも

私は輝の右手に自分の左手を重ね、立ち上がった

「じゃあまた明日ね」

「じゃね、美倉サン」

深井君に手を振りながら
図書館の扉をくぐる

輝の右手を握りながら
…握りながら？

「あっ……」

「え？どした？…」

手を握っていたのを忘れていた。
私は少し赤くなりながら輝にそれを教えると
また輝も赤くなって

「え…あっ…ごめんっ／＼」

照れたように頭を掻く
すると髪で隠れていた耳が真っ赤になり見えてきた
それを見たらなんだか私まで恥ずかしくなって
顔が熱くなっていくのを感じていた

多分、今

私達は誰が見ても顔が赤いとわかるほど真っ赤だろう

「ううん…大丈夫／＼／」

二人共、一言も発しない、沈黙のまま歩く

「……………」

私は輝の少し後ろを歩く

でもこの距離感は何か心地好いような…
でも何か足りないような

絶妙な距離感だった

「カノン」

名前を呼ばれ

俯いていた顔をあげると、そこに輝の姿はなく
いつの間にか輝は隣にいた

「寂しいから」

「…うん」

彼が隣にいますと

妙に安心して心地好い

さっきの距離感とは違う

夕方の太陽は眩しく朱色に世界を染める

その朱色は隣にいる彼をも朱色に染めていく

その朱色な横顔をじっと見つめていた

「あ……」

「…どうした？」

ふと思い出した

私の親友と…想い人

「華と…俊哉は…？」

「ああ…俊哉くん…」

輝は俊哉の名前を口にだすと切なそうな顔をして

「帰ったよ…少し前」

「…そっか」

輝は前を向いていた顔を私に向け、やはり切なげな顔で私に聞いた

「やっぱり寂しい…？」

「え……？」

彼からの意外な言葉

「迎えに来たのが…俊哉くんじゃなくて俺で…」

「なんで…」

「だって…カノンは」

「……………」

その言葉の先は何故か彼の口からは聞きたくなかった

「俊哉が好きなんだろう？」

「……………あ…」

彼は私の返事を聞かずに笑顔で私の前に立ち
そして

「三上輝！全力でカノンを応援します！！」

「……………ハイッ」

「…………ハハッ…ダッセエ」

小さな声で何かを呟いた

大声での宣言のあと輝は私の隣に戻る

また心地好い沈黙に戻る

時よりぶつかる自分の左手と輝の右手がなんだかじれったい

（…あー…もう！！）

じれったくて勢いで繋いだ手は意外に冷たくて
小さいころよく手を繋いだ帰り道を思い出す

「…あのさ…」

「？」

ふと声がしたほうを見てみれば真っ赤になった顔

「輝…顔…赤い…」

「…ありがとう」

俊哉への気持ちに揺らぎはまだあるけれど
輝がいたらなにがあっても大丈夫な気がする

そう

彼さえ居てくれれば

【next】

夕日の、
(後書き)

まるで死亡フラグッ!!

S
a
n
a

心変わり、
(前書き)

心変わり、

【27】— n o t s i d e —

———次の日

今、この中学校は期末考査一週間前。
何もしていないと焦りだす者もいれば
まだまだ大丈夫だと余裕の者もいる

そんな中、2年2組は既に範囲は全て終わらせ
万全の準備のなか期末考査をまっていた。

「たかが遊園地ごときで」

華は溜め息をもらす

この二組の異様なやる気は全て担任の言葉からだった
他のクラスは遊園地など興味なさそうに勉強を進める

「みんな楽しみなんだよ」

「ガキだねえ…」

「…ん？」

ふと華と奈乃香以外の声が聞こえた。
そこにいたのは

「あ、おはよう。」

「おはよ、美倉サン」

ニツコリと笑いながら奈乃香に挨拶したのは、
亮輔だった。

「ガキなのはお前やろ…」

「それ、お前だけには言われたくねえ」

「どういうこっちゃ！」

「だって、それ。」

そう言って、亮輔が指さした先には

華が珍しく数学のテキストを机上に置いていた

それについて、クスリと笑ってしまった奈乃香

「こ、これは…」

「横峯華も必死ですか？」

堪えきれなくなった奈乃香は肩を小刻みに震わせながら笑っていた

「奈乃香!!」

「ご、ごめ…ッ…!」

「美倉サン、危ないよ？」

「え？」

亮輔に声をかけられたあと奈乃香は後ろの人にぶつかった

「あ、ごめんなさい」

振り返りながらそう言うと、ぶつかった相手は

「あ、ああ……」

俊哉だった

奈乃香はとっさに華の方に向き直し、
気まずそうな顔をしていた。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

そんな奈乃香を亮輔は黙って見ていた

――
昼休み

「深井くん？」

奈乃香は亮輔に呼び出され校舎裏にきていた

「あ、遅かったね」

「ごめん」

亮輔はそこで本を片手に奈乃香をまっていた

話があると聞いていた奈乃香は少しドキドキしていた

「ああ、告白とかじゃないから安心して」

「そんなことは…」

「分かりやすいもん、美倉サンって」

クスクスと笑いながらそういう亮輔

そして、一息ついたあと今度は少し真面目な顔つきに戻り、

「まだ、俊哉に言ってないの？」

「う…うん」

「やっぱ、俺が言ってあげようか？」

一息おいたあと、奈乃香はまっすぐに亮輔を見て言った。

「それはやめて。自分で言いたいから」

亮輔は溜め息をひとつもらす。

「別にいいけど、早めにしときなよ?」

小さく頷く奈乃香

「じゃあ、頑張ってね」

「うん、あ」

思い出したかのように奈乃香は亮輔に

「深井君は教室に戻らないの?」

「ああ、俺はもうちよつというよ。落ち着くからね、ここ」

そう言って、校舎にもどる奈乃香に小さく手を振る。

そして小さく呟くのだった

「早くしないと俊哉が心変わりしちゃうよ?」

手元の本を開きまた読み出した。心地好い風に吹かれながら

「美倉サンの気持ちもね」

【n e x t】

（また、）

（面白くなりそうだな）

心変わり、（後書き）

お久しぶりです（一一；）

やっとテストも終わり

帰って来ましたゝ…（疲

あー…やだなあ

高校受験……………

しかし！

これからも頑張って書いていこうと思います！！

では、また次回

お会いしましょう！！

S
a
n
a

テスト、

【28】—奈side—

———期末考查当日

結局、深井君に注意されて

俊哉に何も言えないまま、期末考查を迎えた

考查の週になればいつもの見慣れた席から離れ

学年進級当時、ワクワクしてした席に戻る

そうすれば、必ず私の後ろは俊哉だ。

彼と仲良くなったのは、もともと席が近かったこともある。

「ハア…」

期末考查の一日目

一時間目は数学だった

数学が得意な私は、すぐに見直しも終わらせ
気がつけば、まだ20分も残っていた

早くこの場所から逃げ出したい反面、
この場所からまた始めたい

そう思っていた

『はじめっ』

結局、なにも進展なく三日間が終わろうとしていた
最後の教科もこの時間で終わりだ。

(よしっ…と)

最後は音楽だったためものの10分で終わってしまった
担当の先生は教卓で爆睡していた

(暇だなあ…)

———カサッ

(……?)

机に四折りにされた紙が置かれた

周りをキヨロキヨロとしたあとそつと開いてみる

すると…

『今日、一緒に帰ろう』

(………?)

『俊哉』

「ええ!?’」

大声をだしたあと咄嗟に口を抑える。

が、周りはザワザワとし

左前にいる華は私の顔を凝視していた

(は、恥ずかし…)

後ろからは明らかに笑いを堪えようとする、俊哉の声がしていた

(でも…)

意外なまでの嬉しさにチャイムがなるまで口の緩みはそのままだった。

放課後

「奈乃香、帰ろう」

「う、うん！」

俊哉がわたしに話しかけてくれてる

そんな小さな事だけで
軽く跳びはねてしまういきおいだった

だけど、

「美倉、今日な急遽委員会することになったんだ」

「えゝ……………」

やっぱり最悪なタイミングだった

「ごめん…」

「いや、待ってるよ」

「時間かかるから帰っていいよ？」

「美倉!!」

越後先生に呼ばれた私は俊哉に小さく手を振り走った

「待ってても良いんだよね…？」

【next】

テスト、
(後書き)

私もテストが終わり
全部返ってきました…

S
a
n
a

下駄箱、

【29】— n o t s i d e —

「カノンいるー?」

二組の扉を開いたのは奈乃香の幼なじみだった

「輝? 奈乃香なら俊哉と帰ったで?」

「あ、そう…」

輝は少し残念そうな表情をして、そっと扉を閉めた

（一緒に帰ろうとしたのになー…）

彼が下駄箱へと足を向けると、すれ違う生徒は

「輝、じゃーな」

「三上くんバイバイ」

一人一人が挨拶を彼に交わす。

下駄箱につくと、輝はある靴が目に入った。

（あれ？カノンの靴…？）

不思議に思った輝だったが、すぐにニヤリと笑って
下駄箱の下に腰かけた

「ん？」

そこに亮輔があらわれた

「輝、お前何してんの？」

「んーちょっとね」

「だれか待ってんのか？」

「あんな――――」

【next】

決意を、（前書き）

修正いれました

ご迷惑おかけします

m
（
m

S
a
n
a

決意を、

【30】—奈side—

「結構長引いたなあ…」

委員会がただの雑談会と変わり、グダグダと校舎にいた私

窓から外を眺めてみれば既に空は太陽など消え、月が儚げに輝いていた

しかし街を照らすのは月ではなく街灯や車たち

そんな中でも懸命に輝きつつける月を眺めながらゆっくりと廊下を歩いていた

「さすがにもう、いないよね…」

暗くなった下駄箱に付き
そっと歩いてみる

———カタン

音がしたほうを振り向いても、そこには誰もいなかった

「そんな訳…ないか」

そもそも彼が私と帰ろうとしたのもただの気紛れ

少しでも期待してしまう自分が嫌でたまらない

そんな事思ったら海晴に怒られちゃうかな

自分の靴を片手にとり床にパタリとおとした

靴を履こうとしたとき、暗くて見えなかった人影がひとつ。

「誰…？」

そっと近寄ってみると、そこには

「輝…？」

「うん」

「何、してるの？」

「待ってた」

ずっと？

そう聞けばまた輝は小さく「うん」と頷く

「帰ろう、カノン」

「…うんッ！」

急いで靴を履き

輝のもとへ駆ける

さっきまでの胸にあった暗雲は消え
晴々とした気分だった

輝が待っていてくれた

たったそれだけの事なのに

心の底から嬉しいと思えた

「ごめんな。待ってたのが俺で…」

「なんで…？」

「だって…」

「…待っていてくれた事が嬉しいかったの。ありがとう。輝」

「カノン…」

でも、輝の優しさはまた私を惑わせていく

今、晴々とした気分な事は変わらない

嬉しかったのも嘘じゃない

なのに輝の優しさに素直に喜べない。

そんな自分が嫌

何故？

あの時、あの屋上で決めた筈なのに
彼だけを見つめていくと

叶わなくてもいい
ただ、彼を好きでいたい

そう思っていたのに…

――何故？

――下駄箱 not side

誰もいない下駄箱
…のはずだった

そこには1人の少年がいた

彼は待ちたいと思っていた
彼女に話が見たい
そう、思っていた

だけど、
彼女を待っていたのは彼だけではなかった

彼の恋敵、彼女の幼なじみもまた、彼女のことを待っていた

彼の恋敵と彼女。

彼は2人で帰ってもらおうなどとは全く思っていなかった。

いや帰らせるものか。
そうまで思っていた…

…なのに

「あんな嬉しそうな顔されたら…でていけないよ」

彼女が幼なじみを見つけた時の心からの嬉しそうな顔

それを見てしまった彼は

その場から動けなかった

彼は彼女のそんな顔を見たことがなかった

彼女をそこまでの笑顔にできたことはなかった

それどころか…

「暗……」

彼は暗い夜道を1人で歩く

しかし、その後ろ姿から諦めなどは見えなかった

「ナメんなよ…三上」

彼はまた、決意を新たに暗い空を見上げ歩きだした

―それぞれの決意

【n e x t】

（迷いは続く）

（諦めはしない）

（彼女が幸せなら…）

嫉妬、

【31】 — 奈 s i d e —

今日もいつもの道を歩き学校に向かう

昨日ハッキリと見えていた月。それが今の雲一つない青空を物語っていた

「いい天気だな…」

夏とは思えない穏やかな暖かさが眠気を覚えさせる

欠伸を一つして時計に目をやると、

「ヤバイ…」

遅刻まで、残り5分

――――

「おはようッ！」

――キーンコーン：

「美倉サンおはよ」

「ギリギリセーフやん」

ほぼチャイムと同時に扉を開けた

そこに先生の姿はまだなくホッと胸を撫でおろす

「でも、残念やったなあ奈乃香。」
「へ？なんで？」

鞆を机の横にかけ、華に聞いた。残念というよりも、今の私はラツキーすぎると思う

「今からみんなで下校だよ。美倉サン」
「……………え？」

まだ一時間目も始まってないのに下校？

「なんか、まあ色々あったらしいよ」
「色々？」

「そこが微妙やねん。色々って何やねん」

華がハッキリとしない理由にイライラし始めている

すると深井くんがポツリと言った

「ま、アイツの事情でしょ？理由が曖昧なのは」
「アイツ？」

「ああ、アイツか……」
「ねえ、アイツって誰？」

疑問に思った私が聞くと
深井くんはニツコリとわらって

「美倉サンはわからなくていいんだよ。」
そう言った。

(……………?)

――
――
(あんなに走った意味は…なんだったの…)

そんな事を考えながら下駄箱に向かう

「奈乃香」

ふと声をかけられ振り向いてみればそこには俊哉の顔があった

「……俊哉、どしたの？」

彼が口にした言葉は意外で意外すぎた

「一緒に帰ろう」

「え……」

夢でも見てるんじゃないか
本気でそう思うほど信じられなかった

—輝side

「もう帰ったかな…」

俺は今日も一緒に帰ろうと彼女を探していた

すぐに教室に向かおうとしたが
それはかなわず、流石に帰ってしまったかと諦めかけていた

（流石に二日連続はないかあ…）

腕を頭の後ろに回して階段を降りていると、先輩に話しかけられた。

「輝君、今帰り？」

「あ、そッス」

「じゃあ一緒に帰りましょうよ」

「え…」

返事に困った

いくら奈乃香がいなかったからと言って先輩と帰ってしまっているのだろうか

（俺的には浮気に…イヤ別に付き合っている訳じゃねえし浮気には…イヤでも）

少し考えた結果

やっぱり奈乃香の代わりで先輩と帰るなんて駄目だという結果に至った

「あのッ！」

意を決して先輩に断ろうとしたところで
フィと下駄箱に目をやった
するとそこには奈乃香が：俊哉といた

一瞬、奈乃香と目が合った気がしたが直ぐに外れ
奈乃香は俊哉と下駄箱の扉をぐり抜けた

柔らかい笑顔を浮かべて

「輝君？」

「：いいッスよ」

「え？」

「帰りましょ、先輩」

つくりものの笑顔を先輩に向けて言うと先輩は少し頬を紅くした
こういう時、いつもの自分なら罪悪感を感じていた
それが、今はどうだろうか

罪悪感など全く感じず

それとは違ったものが胸の中で渦巻いている

切ないような自重のような

自分では抑えられない気持ちちがモヤモヤと渦巻く

「結局、俺はアイツに勝てないのか…」

「え？何か言った？」

「いえ。なんでも」

隣に先輩が一緒にいるというのに何かがポツカリと空いた気分だ。

さっきから先輩がなにかを話している

俺はそれに笑顔を浮かべ相槌を打つが話はなにも聞こえないし入ってこない

「あ、あれ宮城くん？」

「……………！」

公園の横を通る時、先輩がふと言った
俺は小さく肩をゆらしたが冷静に横目で見ただけ

「……………」

そこには楽しそうに仲睦まじく会話をしている奈乃香とアイツ。

（なんだ…もう、俺はいらないんだ）

その場から早く逃げ出たくて早歩きをする
なにか先輩が言っていた気がするが流しておいた

やがて先輩送り。一人になる。
思い出すのは先程の二人

―何を話していた？

―何をしていた？

―彼女は笑顔だった？

―俺がいなくても？

―彼女にはアイツなのか？

―俺じゃ駄目なのか？

（……………なんだこれ）

彼女が幸せなら自分はいいと言ったのは誰だ
むしろ彼女が笑顔なのが何故か嫌だった

俺は彼女の幸せを願えていないのか？
いや、そうじゃない

彼女を笑顔にしていたのがアイツだったからだ

（ああ…これが）

——
嫉妬

——
独占欲

自分への嫌悪感を感じる

【next】

（結局、俺は、）

（彼女の幸せが）

（一番じゃないって事か？）

S
a
n
a

嫉妬、
(後書き)

嫉妬、？（前書き）

前回の【嫉妬】とリンクしてます（＾＾）

⇒

S
a
n
a

嫉妬、
？

【32】—奈side—

下駄箱で夢のような瞬間
彼と一緒に帰ろうと言ってきて、
どうしようと迷っていた

「奈乃香？」

すぐにでも頷けばいいのに動揺してしまい
階段の上に視線をそらす

するとそこには輝と先輩が話していた

一瞬、輝と目が合った

私は何故かそれから目をそらし、
逃げるように彼に返事をした

「帰ろう」

「う、うん！」

早くここから逃げ出たくて、とっさに彼の手をとり学年門をくぐった

「…乃香ッ」

「……奈乃香ッ！」

「へっ!？」

いつの間にか公園の前にまできていた。

「な、なに？」

「手。痛いよ」

俊哉は小さく笑いながら手元を見た

「あ……………」

私はここに来るまでずっと俊哉の手を強く握りしめていた

「ッごめん！」

バツと勢いよく俊哉の手を放し

握りしめていた手を胸元において逆の手で握った

今さら、握っていた手が熱をもちはじめる

それどころか手だけでなく頬まで熱くなっていく

「いいんだ。でも少し疲れたし休みたい」

「じゃ、じゃあ公園のベンチでいいかな」

私が聞くと俊哉は小さく頷き、私より少し前を歩いた
そして、少し距離をおいて二人ベンチに座る

（今しか、今しか謝るチャンスない……！！）

「あ、あの！」

「ん？」

「わ、私……」

（あ、あれ……）

今言うと思ったハズなのに
いざ、俊哉に言うとなると何故か口が動いてくれない

「あの、ね、ッ」

唇が震えてくる。

目に涙がたまってくる

涙は耐えきれず零れ落ちていく

止めようとすればするほど止まることはなく、逆に溢れていく

「…奈乃香…」

「…ッ…ック…」

ふいに彼の手が私の瞼に触れる

かと、思ったらいきなり腕を引かれ、

気が付くと私は彼の腕の中だった

「……と、し…?」

「……………」

俊哉は黙ったまま目を伏せたまま私を抱き締めている

胸に安心感と不安感が同時にくる

―何故

―どういう事

―期待、

―してしまうから

―ヤメテ、

(…?…ヤメテ?)

今、何故私は拒絶をした？
少しだが拒絶感を覚えた

(…あ)

「…俊哉」

「ん…?…ああ、ごめん」

離された身体は物足りない気もしたけど

ホッとしたような気もした

「奈乃香、俺…ごめん」

「いいってば」

「違って、」

「？」

「今まで、信じられなくて…奈乃香を傷つけて…」

「え…!!」

違う、謝らなくちゃいけないのは私だ

あの場から逃げ出したのは私で

貴方と向き合うのを拒んだのも私

「俊哉は…謝らなくていいの…」

「奈乃香…」

「ごめん…なさい」

「ううん。いいんだ」

俊哉は私の手を握り笑った
私も握り返して笑った

『明日になれば笑い話に変わるよ。だから——は俺と一緒にいれば大丈夫だ』

頭によぎったのはあの人の言葉

そうか、もうすぐ、貴方の『あの日』だね

「それで、奈乃香に聞いて欲しいことが…」
「うん？なに？」

彼の顔を見ると真っ直ぐな瞳。

なんだか見ていられなくなって反らした

しかしその先にあったものは…

（輝…？）

先輩と2人で帰っていた

先輩は少し頬を染めて輝の隣を並んで歩いていた

（…あ…）

あの場所は昨日の私の場所
小さい頃からの大切な場所

心になにかポツカリと開いた感じがする

「奈乃香？」

「へ！？」

「聞いてた？」

「…ごめん…もう一回お願いしてもいい？」

「いや、そんなに大したことじゃないし
「そう？」

「うん。帰ろうか」
「そうだね」

「ふー……………」

家につき自分の部屋に入りベッドに飛び込んだ

今日1日に起きたことが頭の中で一気に巡る

俊哉の事で頭がいっぱいだ

…なのに、どうやっても輝の姿がちらついてくる

あの時の輝を

「なんなの…？」

俊哉で沢山だった頭の中はだんだんと輝で沢山になってくる

ますます分からなくなってしまふ

この、気持ちって

「…なんなのよ…」

,

【next】

（言葉も行動も）

（全てが気になってしまう）

（何故？）

待受画面、

【33】—華side—

奈乃香も俊哉もそして輝までもが帰ってしまい

私は仕方なく一人で帰ることにした

「奈乃香…大丈夫やろか」

ポツリと呟いてみるが、やはり一人。
相槌をうつ相手はおらず、聞こえてくるのは自分の足音と蝉の鳴き
声だけ

「……………」

しばらくは何も考えずただブーツとしながら道を歩く
すると

「…危ねえ!!」

「えッ？」

突然腕をひかれ目の前を凄いスピードで車が横切った

「オイ、大丈夫か？」

「あ、ハイ…って」

「ん?…ああお前か」

「亮輔…」

助けてくれたのは亮輔だった。
あまりに意外だったことに驚いて黙りこんだ

「オイ、礼くらい言えよ」

「あ、ありがとう」

慌ててお礼をすると、亮輔は拍子抜けたような顔をしていた

「な、なに？」

「イヤ、お前も礼とか言えるんだなあと思って」

私が呆れたような顔をすれば亮輔は優しくふわりと笑い、私の肩にポンと片手を置いた

「怪我はないみたいだな。ちゃんと周りみながら歩けよな。じゃ」
「う、うん」

妙な感じだ

いつもなら憎たらしいことを平気で言う亮輔が
私を助けて心配してくれた

前を歩く亮輔はいつもとは別人のようで

なんだか変な気持ちになる

「……………」?

—————
—————
—————

「……………」

家につきソファーに寝そべって目を閉じてみた

聞こえてくるのも見えてくるのも私の嫌いなやつ

これは…もしかして

いや、もしかしなくても…

(……………恋……………?)

「イヤイヤイヤイヤ!」

ありえないと唱えながら
クッションに顔を埋める

「だって、ありえへん…」

しかし、考えてみればいつも喧嘩ばかりしていた私達

私は、それが本気で嫌だったのか

亮輔は誰にでも優しくかった

その優しさは俊哉や輝とは違った優しさで

決して主張した優しさではなく、静かにわからないような小さな優しさ

だから憎まれ口を叩いても周りの人たちは亮輔から離れようとはしない

そんな亮輔を知っているから私は心からアイツが嫌いにならない

それどころか亮輔と喧嘩するのはどこか楽しくて

でも、その楽しさがこの想いに気付かせるのを止めていたとしたら…
もしかしたら

「亮輔…」

『ピルルルルル』

「!？」

いきなり携帯がなり体が跳ねた
急いで手にとりディスプレイを見ると

『奈乃香』

「?もしもし？」

『あ、…華…?』

「せや、どないしたん？」

『華…私……ッ』

「…泣いてるんか!？」

『自分、がわか、んない…よ…ッ』

奈乃香は泣きながらも必死に話をしてきた

まず、落ち着かせようと優しく慰め
何があったのかゆっくりと聞いた

『私…俊哉に告白されて』

「それで？」

奈乃香はゆっくりと話を始めた

「そっか…」

『うん…』

電話越しに聞こえる奈乃香の声は

また微かに震え始め

その声が小さく何かを呟いて一つ「ごめんね」と言って切れた

『ツ…ツ…』

耳元からきこえる電子音

それを切り、待受画面を見つめていると

なんだか自分が情けなくなった

輝にえらそうにあんな事を言っておきながら
私は奈乃香のことすら知らないことだらけで

奈乃香がきつと自分を頼り電話をかけてきたというのに、
なにもできず

「私…」

結局、私はあの時から何も変わらず

奈乃香に頼ってばかりで頼られる人間なんかじゃ

なかったって訳だ

【next】

(恋心?)

(そんなもの)

(私は知ってはいけない)

待受画面、
(後書き)

次話予告

俊哉に告白されて嬉しいハズの奈乃香は
心から嬉しいと思えなかった…その理由とは？

S
a
n
a

偽り、

【34】 — 奈 s i d e —

それは、

本当にいきなりだった

俊哉と別れ、家につき

ベッドに横たわっていた

気が付くと窓から覗く景色は茜色の夕日が輝いていた

「夕方か…」

眠りにつく前に何か考え事をしていただけ
何を考えていたのだろうか

ただ、なんとなくだけど
胸が痛いような気がした

『—♪—♪』

メールの着信音がきこえる
私は携帯を探してディスプレイを開く
待受画面には小さなメールのマークがある

それをクリックし、内容をひらくと送信相手は

『俊哉』

Time—2009／7／20—17∴15
From—俊哉

Sub—無題

話したいことがあるんだ
今からさっきの公園に来てほしい

待ってるからさ

俊哉

正直いって
行こうかどうか迷った

こんな中途半端な気持ちで俊哉に会いたくない
でも

俊哉に会ったらこんな気持ち吹っ飛んで行くかもしれない
2つの考えてが交差して
頭が痛くなってくる
しかし、気付いた時には私は靴を履き
そして玄関の扉に手をかけていた

（大丈夫…大丈夫…）

微かに震える手を握り

少しだけ重く感じる扉をゆっくりと開ける

俊哉に会ってさえしまえば大丈夫だから

大丈夫、大丈夫なのだから

頭では考えていられるのに何故か重くなる足取り
一歩がこんなに重く感じるのは初めてだ

（公園って…こんなに遠かったっけ…？）

たいした時間歩いた訳じゃない
なのに疲労感はいつもの倍あった

公園につくとまだ制服姿の俊哉がいた

（ずっといたのかな…）

「奈乃香」

俊哉は私を見つけると

嬉しそうにニコリと笑い、私の元に駆け寄ってきた

俊哉の笑顔を見たら少し胸がツキンとする

「俊哉、話ってな…」

最後まで言葉を言うことは叶わなかった

私は俊哉の胸の中に、いた

私は訳がわからずされるがままで黙る

「ごめん…我慢できなかった」

俊哉の鼓動がどんどん速くなっていくのがわかる

でも、私は本当にされるがままで

体が熱くなるわけでもなく

鼓動が速くなるわけでもなかった

「俺…奈乃香が好きだ」

「…！」

ずっと望んでいた彼からのその言葉
驚きはしたもの、それ以外は…

「私…私は…」

「…うん」

私は？

当たり前だ

俊哉のことが好き

俊哉が好きで何度も泣いた

俊哉が好きで何度も胸が傷んだ

俊哉が好きで嬉しかった

俊哉が好きでよかった

それで？

今は？

「私は…」

答えなんて

とうの昔に決まってたハズだよ

そうでしょ？

奈乃香

「奈乃香…」

「私…も、好き」

消え入りそうな声で呟いた

それを言った途端

私の中で暗い雲が広がる

心に彼がちらつくのは

どうしてか

「ありがと…奈乃香」

「うん…」

そのあと、俊哉は何度も私に好きだと言った
私はそれに小さく「私も」と何度も言った

その度に彼の顔がちらつくのは…何故だろうか

――
――

俊哉に送ってもらい私は家についた
帰る途中、俊哉は私にずっと笑顔で話しかけてくれていた
それが嬉しくて私も笑顔でそれに返した

家の前でお礼を一つして扉をあけると
シンとした空気が私を冷静にした

「私は…俊哉が好き」

そう

私は俊哉が好き

だから

好きと言って当たり前

なのに

「なんで、泣いて、るんだろ…ッ」

心に響くのは俊哉ではなく

【彼】の声だ

『おはよー』

『どした？大丈夫？』

『みーっけ』

『一緒に帰ろう』

自分で自分がわからない
止まらない涙が
また私を惑わせる

「わかんない、よ、ッ」

私は携帯をてにとり
親友に助けをもとめる

何かが解決する訳でもないのに
自分の情けなさがまた何かを刺激した

「つまり」

——それでも私は

——俊哉が好き

——だと思いたい

『俺、その笑顔大好き』

『カノンの笑顔』

【next】

・

偽り、（後書き）

なんかグダグダですね

：スイマツセエエン！！

展開がいきなりだよ！！
訳わかんないかなあ：

紗渚は
わかるんだけどなあ：

よし死のう！（↑エ

でわわノシ（↑待て

S
a
n
a

予想外（前書き）

お久しぶりです

m (m

あまり内容はないですが
一応読んであげて下さい

⇒

予想外

【35】

夏休みまであと一週間

テストが終了し、気の抜けた生徒たち
そして成績をまとめ夏休みの課題と慌ただしい職員室

どれもいつもと何の変わりもない
いつもの日常だ

しかし期待に胸膨らませるクラスメートの中
私の気持ちだけは、晴れないままだった

俊哉と付き合うこととなり
以前よりも俊哉とよく話すようになった
周りはそれに

『アイツらいつの間に仲直りしたんだ』
程度で済まし

付き合っているというところまでは気が付きはしなかった

私はそれになにかホッとしていた

けれど、

「輝、おはよー」

「おう、雅史！」

廊下で明るく友達と 挨拶を交わす輝

輝を見ると今までに感じたことのないような

なにかやるせないような気持ちになるのだった

それなのに輝から視線を外すことはない

時々、目が合う時がある

そんな時は自分から視線を外す

最近はその繰り返しだ

「奈乃香 あ」

「ん？」

「夏休み、どこ行く？」

私の机に額を押し付けて
呟くように言う華。

「うーん…海とか？」

決して目の合うこと無く会話がすすんで行く

華は机に顔を押し付けて、

何も見ていないように見えるが

私は知っている

小さいその目線の先にいる

彼のことを…

いつからだったか

華の目線の先にはいつも彼がいた

でも、華自信はそれを認めたくないらしく

さりげなく話をする

何事もなかったように笑顔で話を変えられる

でも、それでも華の深井君を見る眼差しは

以前とは違うどこか切なげな、女の子の眼差しだった

「でも、2人じゃ寂しいよねえ…」

「せやなあ…」

「誰か誘う？」

「んゝ例えばあ？」

「…深井くんとかあゝ？」
「あー…あ？」

ガタツと机が揺れた
私の頭上に影ができた
華が立ち上がったからだ

華は酷く焦ったように

「な、ななななな！？」
「？」

いきなり立ち上がったからか周りが一瞬ざわついた
が、皆「なんだ、華か」で済ましてしまう

「奈乃香！？冗談も大概にせえよ！！？」
「え、別に冗談なんか…」

言っていないよ
そう言おうとするが
華はすぐにまたツラツラと言葉を並べはじめる

少しうるさい

「それに「うるせえな…」」

誰かが言葉をかぶせてきた
声の方を見ればそこには

「なに？なんの話してんの？美倉サン」

「あ、夏休みの話を…ね？華？」

華を見れば先程の焦りはどこかに消え
なにか冷静な顔になり
ブツブツと呟いていた

（華…？）

深井君を見ると
彼もいつもとは違う華に首を傾げていた

それもその筈だ
いつもなら何のきっかけもなしに口喧嘩が始まる
それなのに今日は大人しくなんの挑発もしてこない

「な…っ休みね…」

「うん、海でも行こうかなって…」

「あ、それなら」
「？」

深井君はなにかを思い出したかのように手をたたく

「それならさ、」

「？」

「なんやねん」

その次の言葉に
華や私だけじゃなく
周りにいたクラスメートも驚いた

「俺ん家の別荘でも来る？夏休みにさ」

何が起きるかは分からない
私達の夏休みが
大波乱が始まろうと

していた

【next】

予想外、（後書き）

あー…

グッダグッダ！！

久し振りだから文が読みづらいΣ（。Д。；）

つか別荘持ってたんですね
亮輔。（↑え

S
a
n
a

季節、

【36】

「深井君って別荘持ってたの!？」

「あれ?言ってなかったっけ?」

深井君が別荘を持っていたことに驚いたが

別荘の近くに海があるらしく

深井君に甘えて夏休みはそこに行くことになった

華は少し乗り気じゃなかったようだけど

その後に何を持っていくか盛り上がり

いつもの華に戻っていた

それに私はホッとした

「楽しみだね」
「せやなあ」

もう明日は夏休みだ
終業式での校長先生の長い話を聞き
成績表を越後先生から渡された

華はいつもと変わらず
なかなかの成績だったみたいだ

『さよーならー』

「お前らアイス食べ過ぎんなよー！！」

|| || || ||

「美倉サン」
「どうしたの？」

鞆にロッカーに入れっぱなしの教科書や

宿題を入れていた私に
深井君が話しかけてきた

「海さ再来週の日曜日から三日間でいいかな？」

「日曜？それって何日？」

「…えっと…8月10日…かな？」

「…10日…」

と、いうことは

10・11・12

だということ

11日は…そうだあの日だ

「都合、悪い？」

「ん、ううん。大丈夫だよ。10日、ね」

別にあの日に家にいなきやいけない訳じゃない
それに折角たててくれた計画だから
私の都合で変えるなんて、勝手すぎる

私は深井君に笑顔で返し
華にも伝えておくと云った

すると教室の扉に手をかけた時

「あ、美倉サン」

「ん？」

「アイツ、最近おかしくない？横峯」

「…なんで？」

「いや、…気のせいかな」

「…うん。」

深井君が、じゃあねと手を振ってきたので
それに笑顔で返した

少し廊下を進んだ所で
足の向かう向きを逆にして
教室に戻った

「……………ん？」

そこには

いつか校舎裏に呼び出された時のように
本を片手に空を見上げている深井君がいた

「どした、忘れ物？」

「え、あの…」

何を言おうとしたか忘れた
けど、一瞬にして思い出したので
本を閉じこちらを見た深井君に言った

「あのね…華は、私の親友なの」

「?…ああ、知ってるよ」

ふわりと笑った深井君は
まるで兄のような優しさが感じられた

普通、いきなりこんな事を言われたら
誰だって不思議に思う

だけど深井君はいつも優しく返してくれて
そしてわかってくれる

「言われなくてもわかってるよ。美倉サン」

「うん」

今度こそ帰ろうと思ったけれど
ふと不思議に思ったことがあったので訪ねてみた

「深井君、帰らないの？」

もう教室はおろか

校舎にも生徒はほとんどいない

それなのに

1人で窓側、空を見上げて

本を読んでいる

普通にクラスの男子がやっていたら

正直痛い

しかしそれをやっても

なんの違和感もない

むしろ溶け込んでいて

それが深井君なんだ

と思った

「んー…空を見てるとき、落ち着くんだよね…」

「じゃあ、今落ち着かないの？」

「落ち着かないっていうか…なんか…ね」
「なんか…わかるかも…」

彼は頭をガシガシとかいて

私と目を合わせずに

また、空を見上げた

それがなにを表しているのかは、

まだよく分からなかった

なんとなくその場の空気では教室を立ち去ろうとした、すると

「美倉サン」

「また、夏休みにね」

「うん…楽しみッ」

【n
e
x
t】

（誰もが何かを抱えてる）
（そんな季節）

季節、（後書き）

あ、恋愛フラグではないですよ（・ω・；）

亮輔くんはいつまでもいい人

そしてギザなアホです（↑

紗渚は異常に亮輔くん大好きです

S
a
n
a

それぞれの、？

【37】一輝side一

「海？」

それは夏休み初日の朝
いつもより何時間も早くなった携帯
一回目は寝ぼけていたためアラームかと思い切った
流石に二回目は電話に出た

寝起きでガラガラな声

『もしもし』と精一杯の声で話せば、相手は亮輔。

何故一回目のコールで出なかったのかと怒られた

なんでも海に行くらしい

丁度その日は部活も休みだ

勿論俺は行くと返事をした

「うん、ああ分かった」

亮輔とその他に華と…カノンも行くなりしい

俊哉は丁度夏期講習が重なったそうだ

その事を聞いた瞬間

ああ、俺は俊哉の代わりなんだな…そう思った

そんな訳ない

頭ではわかっているのに…

『そーいや知ってるか？』

「？」

『あの二人、やっと付き合ったらしい』

「あの二人？」

次の言葉で

頭では違うと訴えていたモノが、

一瞬で、

壊れた

『俊哉と…』

「……………！」

やっぱりアイツだけには
勝てないのか

電話が切れた後

行くと行ったことに

酷く後悔した

『俊哉と美倉サン』

【next】

（さあ、）

（いつもの俺を）

（演じよう）

それぞれの、？（後書き）

短い………（汗）

こんな感じで

短い話があと二話か三話
続きます

これは今週中にUPできる
…と思います

最後の○の意味分かりますかね？

あ、分からない？

えっとあれは…

先に進めば分かります

あ、普通にわかる？

たぶん、それで合ってます

S a n a

それぞれの、？

【38】—華side—

「あつー…」

蝉の鳴き声がうるさい。

私は窓をしめ、エアコンをつけてベッドに横たわる

暑い時に暑いと言うと余計暑くなると言うが

そんな事言ったところで

少しでも涼しくなる訳じゃない

ベッドの布に触れている部分が熱を持ち始める

ちらりと横目で机の上を見れば

嫌でも見えてしまう山積みの宿題

「もう…来週かあ…」

海に行くのは凄く楽しみ

奈乃香と行くのならば最高のイベントだ

なのだが…

もう、見ないと決めた人と三日間も一緒にいるなんて
正直、堪えられない…

まだ決心の鈍い私は
三日間を無事に過ごせるのだろうか

「頑張ろう…」

奈乃香のために…
それに今まで嫌な奴だと思っていた相手だ
意識しなければ大丈夫

『ピルルルルル』
「？」

誰だろうか
名前表示には

番号が表示してあるだけ

イタズラだったら怒鳴りちらしてやろう
そう思い、電話にでた

「もしもし」

『……………横峯？』

その相手は

すぐに誰だかわかった

わかったけれど

すぐに慌てて切った

『あのブチッ…ツ…』

「……………あ」

切って…しまった

切った瞬間後悔した

今、この気まずさをつくってどうする？

かけなおしてみようか

いや、何を言えればいいのかわからない

ならどうする？

と、いか何故アイツは私の番号をしっていた？なんのために電話をかけてきた？

考えてだしたらキリがない

気が付けば、また頭にはアイツのことしかない
それを振り落とそうとして大きく頭を左右に振った

携帯をベッドに落とす
部屋をでた

その後

また部屋を訪れると

携帯のランプが青く光っている

そこには

見覚えのある番号

着信履歴にはその番号が二つ並んでいる

（なんなんだ…）

意識しないように…

そんなの無理だ、たぶん

また枕に頭を押し付けて
ゆっくりと瞼を閉じる

するとやっぱり見えてしまうのは……

【next】

（起きたら取り敢えず
（番号登録）

（しましうか）

それぞれの、？

【39】— 亮 s i d e —

「…暇すぎる……」

夏休みに入りもう一週間が過ぎる
初日には見たくない程大量にあった宿題は
もう半分以上終わらせた

いつもは適当に仲間を集めて適当にでかけるけど
今年は塾があるからなどほとんど駄目だった

長い休みはつまらない
部活に入っている訳でもなければ、
塾の夏期講習があるわけでもない
塾なんて行ってない

いっそ学校にでも行ってみようか
特等席で本でも読むか？

いや、今こんな暑い中外にでる気力などない

「…………早く来週になんねえかな……………」

あと一週間たてば暇じゃなくなる

俺の家は世間様から見れば”金持ち”と言うらしい
少し離れた所に別荘がある
海も近いまさにリゾートだ

来週そこに4人で行く
あまり自分としては思いたくないが、
実際、楽しみだ

輝に美倉サン、そして横峯
メンバーはまあまあ
俊哉がいないのは残念だが
余計な奴が1人もいない

最高。

なのだが…

「……………」

メンバーの中で1人
最近おかしい奴がいる

そりゃ言わせてみれば
全員おかしいが、
美倉サンがおかしいのも
輝がおかしいのも
大体察しがつく

しかしアイツは、横峯は何故おかしいのか分からない

前までは
俺が喧嘩を吹っ掛けたら
煩い位の暴言で返してきたのに最近は

『うん』『へえ』

などとしか返ってこない

調子が狂う

このまま海に行っても何も楽しくない
何かあったのだろうか

声をかけるべきか？
話を聞くべきか？
どっちにしろ

「めんどくせえ…」

しかし
このまま楽しくない三日間を送るのは嫌だ
とりあえず電話をかけてみる事にした

「確かこの辺に…」

鞆の中を探り
何かあった時のために美倉サンに教えてもらった
横峯の携帯電話の番号のメモを取り出す
自分の携帯を取り
手早く番号を押していく

「っと…090の…」

『ピルルルル…』

耳元で電子音が鳴る
何コールかしたあと
聞き覚えのある声でした

『もしもし?』

「……………横峯?」

『……………』

「あのさ、俺だけど…?」

気が付けば

アイツからの声はなく

一定のリズムを刻む電子音が響いていた

「……………(怒)」

切れた

いや、正確に言うとか
切られた

知らない番号↓出てみる↓俺だとわかる↓切る↓話したくない

「つまり、そういう事かア？（怒）」

ムキになった俺は再び電話をかけた

でたら何て言ってやろうか取り敢えず怒鳴ろう
普段怒鳴るタイプではないが、怒鳴ろう

などと考えていたが

一向にでる気配はない

電話を切った

もう一度かけてみようなどとは思わなかった

「なんだよ、アイツ…」

いつも頼んでもないのに

突っ掛かってきて

ガミガミうるさくて

鬱陶しくて
本当ウザくて

でも……

いきなり、
いきなり静かになりやがった
なんでだ？

調子が狂う
取り敢えず俺がいると静かになる

俺？

俺が原因なのかよ

そんなの面倒くさすぎる
面倒なのは嫌いだ

「来週……」

取り敢えず
話してもしてみっか

面倒だけど

【next】

（あ、メアドも）

（聞いたときよかった）

それぞれの、？（後書き）

お久しぶりです

また更新忘れてました↑

いやー受験が…（泣）

このままニートに…

なんて道も…↑

いや、高校は

きちんと行きます

頑張ります

S
a
n
a

それぞれの、？（前書き）

ものっそい
短いですm
〔
m

S
a
n
a

それぞれの、？

【40】 — 奈 side —

「明日かあ…」

鞆に服や洗面道具を入れていく
ほとんどの物は別荘にあると深井君が言っていた
必要なものだけを詰めたら
随分と鞆の中身はスカスカ
仕方なくもう少し小さな鞆を探しそれに詰めていった

「あれ？メールかな…」

ふと携帯をみると
ランプが青く光っている
画面の左下のメールマークを選択した

Time—2009／8／9—20：42
From—俊哉

Sub—明日

明日から海、楽しんで
来てな。
またメールする

|||||END|||||

…そっか

明日から俊哉はいないのか

じゃあ、気にする事なく
海を眺めていようか

…気にする？

…私は何を気にしたんだ？

まあ、いいか

――――次の日

薄い空色のワンピースを着てジャケットを羽織る
片手に鞆と携帯を持って、鏡の前に立つ

「これでいいかな」

いつもの横結びは、
少し低めにお団子にした

鏡に向かって
ニッコリと笑う

…うん、いつもの私だ

左手首の時計は
もうすぐ待ち合わせ時間を示している

「さてと、行こうかな」

「…………あ」

部屋の扉を前にして
忘れ物を思い出した

「…行ってきます—」

——ガチャ

——パタン。

【next】

（アナタへの）

”行ってきます”
（

それぞれの、？（後書き）

おはこんにちばんわ！

さて、ようやく次で
『みんなで海へGO！編』
が始まりませう

そんなに長くはならない！！
…ハズ！！…です！！

でわわ

また次回お逢いしましょう

S a n a

待ち合わせ、

【41】

「ごめん遅れちゃった!!」

待ち合わせ時間から

五分経っていた

奈乃香は少し息を切らす

他の三人はすでに

待ち合わせ場所に居た

「大丈夫だよ美倉サン」

亮輔はニツコリと笑った

輝と華も奈乃香に気がつき振り向いた

…そこには

いつもとは違う

制服ではない私服で違う雰囲気を出している

皆の美倉奈乃香

それを見た三人の反応

輝は案の定、頬を染めて

モゴモゴと何を言おうか迷っている。

いつもなら直球で

「可愛い!!!」

などと言うのだから

図書館で会った時とはまた違う私服姿でどうしたらいいのか分からないのだ

彼女の親友である華は

…何故か肩を震わせている

おそらく今思った事をそのまま口にだせば

自分が止まらないのを察したのだろう

必死に我慢をしている

そして、亮輔はというと

「そういえば美倉サン」

「なに？」

「今日可愛いね」

「「!？」」

…直球ドストレート

爽やかな笑顔でサラリといい放った
本人はあまり気にしていない様子だったが

華は哑然とし

輝は普段の亮輔から考えられない
という様子だった

そんななか

言われた当人奈乃香は

「あ、ありがとう…」

と、照れたように
頬を染めていた

「……………」

「輝……………」

ショックを隠しきれていない輝
そんな彼の肩を優しく叩き
慰めている華

「輝…?」

「何でもないよ。カノン」

いきなりズンと肩を落とした輝を心配した奈乃香
そっとしゃがみ顔を覗く

その可愛さに

（抱き締めてしまいたい）

そう思ったが

出しかけた右手に力を入れ、しまった

奈乃香が輝に触れようと

右手を伸ばす

…が、輝はそれを静かに拒否をし、視線を反らし立ち上がった

奈乃香は目の前の輝がいなくなり俯く

行き場のなくなったその右手を膝の上に置いた

「……………」

二人の間に何か

異様な空気が流れる

「な、奈乃香。行こか」

「輝、行くぞ」

華と亮輔はその空気を感じとり

それぞれ男同士、女同士で手をひいた

「ああ…」

「うん…」

初日の初めから

まさかこんな気まずいとは思わなかった奈乃香

これから三日間

どうなるか

それはこれからの

お楽しみということぞ

【next】

（気にし過ぎ）

（そんなことは自分でも）

（分かっているんだ）

待ち合わせ、(後書き)

短ッ!!

Σ (。；)

さあて

次話投稿はいつかな?

私にもわかりませんよ!!↑

S a n a

失礼しましたm
(
m

風鈴の、

【42】一輝side一

「あー………」

案内された部屋に入り
ベッドに倒れ込んだ

そう、すでにここは亮輔の別荘だ
車での移動二時間
ついた瞬間三人が声をそろえて言ったのは

「なにこれ」

そして今いるのは
何故か一人一部屋ずつある
一人用にしては広すぎる俺の部屋だ

「どうしょ…」

車の中でもあの気まずさは抜けなかった

亮輔はずっと寝ていたし

華は無理に会話をしようとするさかったし

カノンは…

気まずそうに俺をたまにみつっ華に合わせてた

来る前にいつもの俺を演じていようと決めていた
なのに初日から崩して

何がしたいんだ俺は

…あれ

いつもの俺って
どんななんだった

「輝ウ!!!!!!」

「!?!」

その時、

いきなり部屋の扉が開き

そこから華がでてきた

「な、なんだよ!？」

「海、行くて!! 早く!!」

「あ、ああ。そっか…」

「？」

華がなにか不思議そうな顔をしている
何かと聞いてみると
返ってきた言葉は…

「なんか、いつものお前と違う…」

「……………え？」

「いや、いつもなら

『ヤダ、ノックくらいしてよね!! 華さんの痴漢!!』

…とかふざけるくせに」

「…あ、そうだっけ…」

「変なやつぢやなあ。とにかく早うしいや」
「う、うん」

ボタンと扉はしまり
なんとなくまた考えた
いつもの自分がどんな感じなのか…

考えれば考えるほど分からなくなっていく
分からないと知っているのに考えてしまう

諦めようと

頭でとめようとするが

グルグルと頭を旋回する

「……行こう」

考え続けたらダメだ
取り敢えず立ち上がり
支度をして外に向かった

扉を開けると

そこには亮輔がいた
何か言われるかと思った
…が、亮輔は何も言わず

一言

「早く行くぞ」

そう言って歩いて行った

俺は急いで亮輔を追いかけて走った

そしてこのバカでかい屋敷の一番大きな扉に向かう

「海、久し振りだな」

「ああ……」

そんなことを言いながら

――
――
――

「お待たせしましたあ」

ゆっくり歩いていたせい
か俺達は遅れて着いた

亮輔と話していたおかげか
いつのまにか俺はいつもの調子を取り戻しつつあった

「女子より遅いって、どういうこっちゃ！ 亀か！」

「いやゝスイマセン」

「……………」

（…………あれ？）

亮輔が何も言わない
どこでだってお構い無しに始まる
そんないつもの喧嘩が今日は始まらない

華の言葉になんの反応も示さない亮輔はおかしいが
完全無視の亮輔に何も言わない華も変だ

「奈乃香…行こか」

「え、あ、うん」

華はカノンを連れて海に向かって歩いて行ってしまった。
疑問に思った俺は亮輔に

「なあ今日の華さん変だよなあ？」

「……………」

「亮輔？」

「……………知らねえ」

知らない訳ないだろう

そこまで知っているけど知らないふりしてます。

そんな雰囲気をもしだしていれば

誰だって何かあったとわかってしまう

しかし、今回は少し違うようだ

何かあったのなら行動で示して、あっさりと片付けてしまう
そんな亮輔に常日頃の余裕が見えない

多分あれは亮輔の苦手な

『分らない』

ということだろう

原因はみたところ華。

俺やカノンにはいつもの調子で喋るのに

亮輔とはさっきの様子だ

歩いて行った亮輔の背中からは分かりやすい位に苛立ちの色を放っている

「：取り敢えず遊ば」

考えるのはもう疲れた

俺は羽織っていたパーカーを脱ぎ捨て
海へと駆け出した

全員へ端から海水をかけて

笑い合い

取り敢えずの笑顔を取り戻した

「辛気くさいのは苦手」

「疲れたー：」

必要以上にはしゃいだ

お昼時ということで亮輔は屋敷に戻り昼食を頼みに行った

(どこまでお坊っちゃんなんだアイツは…)

そして俺は今、青空とパラソルの下
大きめのシートの上に座り込んだ

ここは小さな海水浴場

そのため人は俺達以外にいなかった
静かで、たまに吹く風が心地よい

まあ、もっとも俺は雨が好きだから
夏はあまり好きではない

しかし

心地よいのは本当だ

「…飲む？」

「？」

ふと冷たそうな少し汗のかいた缶が目の前に現れた
それと共に今日久し振りに聞いた声
風鈴のような穏やかで涼しげな声

その声の主の顔を見て
俺は静かに笑った

「ありがとう、カノン」
「…うんっ」

カノンは俺が笑ったことで安堵したのか、ホッとした表情で俺の隣に座った

「カノン」
「ん？」

「…その、今朝はごめん」
「あ、ううん」

カノンは笑って
「大丈夫だよ」
そう言った

それにホッとした俺は
いつもの調子でカノンと話すことができた

「そう言えばカノン水着は？」

「あ、部屋に置いてきちゃって」

「そっか」

「うん、それに眺めるだけでよかったし…あ、ちょっとゴメン」

カノンは鞆から携帯を取り出した

携帯は小刻みに震えている

カノンは俺を見てきたので

でていいよ。という身振りで伝えた

「もしもし？」

誰だろうか

華か？きつと何か面白いものでも見つけたのだろうか

しかし、その相手は

今まで忘れていたことを思い出させる人物だった

「うん…俊哉？」

【next】

（逃げ出しても）
（いいのだろうか）

風鈴の、（後書き）

横浜いいですね（↑

いや、校外学習行ってきたもんで（↑

あ、続きどうしよ…

基本的に考えながら書いてるんで↑

だからグダグダなんですね

自覚はあります

次回は一応1日目終了あーんど2日目突入
位だと思います。多分

華と亮輔君にまで手が届くだろうか…私（汗

でわ、

またお会いしましょう！

S
a
n
a

巡る、

【43】 — 奈 side —

輝と無事に会話ができるようになって
ホッとした私。

その時私の携帯が震えた
出してみると俊哉で

『元気か』と聞かれたので素直に
「元気だよ。それに楽しいし」と答えた
少しきこちない会話が続き
数秒の間が空いたあと

『また連絡する』

そう言って

電話はきれた

私は携帯を閉じて
輝に視線を戻そうとした

「あれ……？」

いつの間にか

輝はそこからいなくなっていた

それに私は

これでもかという位の不安を覚えた

「……………輝」

そのあとお屋敷の人が昼食を持ってきてくれ
私達はそれを食べた

華は昼食を食べたあとに

また海で遊ぼうと言った

深井君も輝もそれに笑顔で答え

私も小さく頷いた

空はもう茜色だ
昼間の鮮やかだった海も
空と同じ茜色
私達はお屋敷につき
今日の話をしていた

「楽しかったなあ！」
「そうだね」

「でも美倉サン海ばかり眺めてあんま遊んでなかったよね？」
「え！？そんなこと…」

嘘。

そのとうりだ
皆が海で遊んでいるとき
私はずっと海の向こう側をずっと見続けていた

水着を忘れた
それも理由の一つだけど
本当の理由は…

「あれ？　そういや輝は？」

「ん？　そういやおれへんなあ？」

「私、見てくるね」

「頼むよ。美倉サン」

そうして

私は大広間をでて

長い階段を3つ上がり

一番奥から二番目の扉をノックした

「…輝？」

具合でも悪くなったのだろうか。

…返事がないと焦ったが

そのあとすぐに返事がきこえてきた

「カノン…？」

「輝、大丈夫？」

「ん?…うん」

「よかった…もうお風呂入れるって」

「あ、うん。分かった」

扉ごしの会話

一瞬ドアノブに手を掛けようとしたが
何故かその手は動かない

扉ごしの会話は変わらない
輝がでてくる様子もない
いつもの笑顔が見たい

見たい…のに、
目の前の扉は開かない

それはまるで
輝に

「入ってくるな」
そう言われているようで

怖かったんだ

「じゃ、じゃあまた後でね」

「……………うん」

私はもしかしたら扉が開くかもしれない

そう思って開かない扉の前で立ち尽くしていた

一つ小さなため息を漏らして

また長い廊下を歩きだした

振り向いても

やはり誰もいなくて

寂しくなる

私は、走った

結局

1日目の夜に

輝を見かけることはなかった

— n o t s i d e —

三上輝は部屋から出ようとしなかった

あの時、あの瞬間

輝は何を思ったのだろうか

携帯が鳴り、

彼女の視線は彼になく

その目に自分は映っていなかった

それがどのような感覚なのか

それは彼にしか分からないだろう

彼が逃げ出したのは

無意識だった

彼が気がついた時

その眺めは鮮やかな海でも、彼女の横顔でもなく
見慣れない、高級そうな天井

「……なにしてんだろ…俺」

いつもの自分を取り戻せていた

そんなことはほんの一瞬で

すぐに心が乱されてしまった

彼女の口から「俊哉」と

その一言が漏れるだけで

逃げ出したくなる

「しかも、あれはないよな…」

彼女が輝の部屋に来たのだ
しかも輝を心配して

しかし輝は顔も出さずに返事をした
それは

きつと扉を開けたら
なにかが壊れてしまう
そんな気がしたのだろう

「カノン…」

―手を、繋ぎたい
―抱きしめたい
―誰にも、渡したくない

そんな独占欲が輝の身体なかを巡っていく
グルグルグルグル
止まる気配のないその想いは

一体どこに向かっているのだろうか

【next】

巡る、（後書き）

お久しぶりです

どもです。ホントどもです。
テストが近いですよー。

え？あ、ハイ

月曜日からです（↑死

それさえ終われば…

それさえ…！

では、またお会いしましょう

S
a
n
a

どうか、**(前書き)**

お久し振りです

修正いれました

ご迷惑

おかけします

m (m

S a n a

どうか、

【44】—華side—

「結局、輝こおへんかったなあ…」

二日目の朝

昨夜は一人足りないまま食事をとった

そして今この部屋には

私と、亮輔と奈乃香

3人しかない

輝はというと

いまだに姿を見せていない

いつまで引きこもっているつもりなのだろうか

今日も

海へ行くつもりだった

けれど、3人で行ってもつまらない

他の二人も

そう思ったのだろう

誰も、何もいわなかった

「うーん…」

「……………チツ」

亮輔の

小さな舌打ちが聞こえた

それは輝への苛立ち

この空気への苛立ち

沈みきった奈乃香に

なにもできない

自分への苛立ち

そして、私への苛立ち

どれか、

もしくは全てであろうか

耐えきれなくなった私は

意を決して
輝の部屋に向かった
何の解決にもならない
そうかもしれないが、
でも何かしないと
気が治まらなかった

「輝？」

「……」

返事がない
薄い扉の向こうから
物音ひとつ聞こえない

「…輝！」

「…なんですか」

「！」

「…オハヨ。華さん」

覇気の全くないその声は
私の真後ろから

聞こえてきた

どうやらトイレに行っていたらしい

「おはようて…もう9時やで…」

「…ホント？ゴメン」

「とりあえずご飯…」

「いないや。」

「でも」といい切らないうちに
輝は私の前を通り過ぎて
そっと扉を閉じた

啞然として
しばらく立っていたが
ムカついた私は
思いつきり扉をけり上げた

中からは
「ゴメン」

としか聞こえてこなかった

夕方になって
それでも輝は一度として
顔を出さなかった

「私…散歩行ってくるね」

「え？一人で大丈夫なん？私も…」

「…一人で行きたいの」

そう言って奈乃香は
小さく微笑んで
その場を立った

そして1時間後…

部屋では
私と亮輔の

2人になってしまった

「……………」

私はこの約二日間ずっと亮輔を避けていた
そんな時に
二人きりになった
逃げてしまおうと
席をたった瞬間

「オイ。」

「…なに」

「なにじゃねえよ。」

「意味わからん」

「お前、俺の事避けてるだろ」

：気づかれていた
まあ、あんなあからさまに避けていたら
バレテしまうか

「知らない…」

「嘘だな、」

「嘘じゃ…」

「いいや、嘘だね。お前焦ると標準語になるし」

「だから…!! 避けてなんか…!!」

「…いい加減にしろよ!!」

大声に体がはねた

普段声を上げない亮輔が

相当怒っていたのだろう

怒りに苛立ち

両方が混ざったそれは

私の口を閉じさせた

「言えよ。なんで避けてんのか。イライラしてんだ」

「い、…言わない…絶対に…」

だって言ったら

全部だめになる

私も

そして亮輔も

声が震える

「言うまで、待ってるからな」

その瞳^めは冷たくて
いつも

人をナメているような
そんな瞳^めではない

私は怖くて

ただ、震えることしかできなかった

いっそ言ってしまった方が楽なのかな

…ダメだ、ダメ。

自分に甘えてしまいたい

そんな時

「あの…坊っちゃん。」

「…なに？」

輝side

いつの間にか空はうす暗くなっていた
今は何時だろうか

時計を見るのもなんだか
面倒くさい

こんなことしても

意味はない

それくらい

わかっているんだ

でも…そうでもしないと抑えられない気がして

俺は…どうしたいんだろう

「輝!」

「…へ? は、華さん?」

酷く慌てた様子で
扉を開けてきた華

「奈乃香が…」

「カノン…?」

胸がざわつく

「奈乃香が帰ってない…」

———
バンツ!!

「輝!!!!」

無意識のうちに
走り出していた

どこに向かっているのか
自分でもよくわからない
だけど、今

彼女のそばに誰かいないとダメなんだ
何故、忘れてしまっていたのだろうか
毎年、忘れずに覚えていた
こんな大事な日を

俺がどうしたいじゃなくて

彼女にどうしてやれるか

「カノン……!!」

・

どうか

【next】

.

.

どうか、
(後書き)

S
a
n
a

濡れた、

【45】—輝side—

「ハア…ハア…」

どれ位走っただろうか

既に太陽は沈み

あたりは暗く

月明かりに照らされている

そんな中

どこに行ったか

分からない彼女を探す

今日、この日は

彼女にとって

そして俺にとっても大切な日なんだ

なのに、
その事を俺は忘れていて
いつも必ず
2人でいたこの日に
ずっと

彼女を一人にしていた

それが

どれだけ

彼女にとって辛かったか

分かるんだ

分かっているんだ

分かっているのに

「カノン…どこだ…ッ」

どこにいる？

彼女ならどこに行く？

何故、分からない

「……あ……！」

そうだ、海だ
カノンはずっと
海を眺めていた

どこまでもつづく青を
ずっと見つめていた

——ザッ

走る足の向きを変え、
さっきよりも速く走る

速く、もっと速く

——彼女のもとへ

たどり着いた
その場所は
夜の海だ

真っ暗な辺りに

それに負けじと

月の光に反映した海は
キラキラと光っていた

俺は息を整えてから

ゆっくりと

砂浜におりていった

——ザッ、ザッ

彼女はどこにいる？

もしかしたら俺の勘違いだったのだろうか

……いや

勘違いなどではなかった

彼女は昨日と同じ場所で

同じように座り

同じように海を眺めていた

「……………」

俺は

話しかけることができず

暫く彼女を

遠目で見つめていた

それを遮ったのは

俺ではなく

誰でもない彼女だった

「……輝？」

「……カノン」

暗い中でもよくわかる

まっすぐな瞳で俺を見る

俺はつい

それから目をそらした

そしてゆっくりと

彼女の横に座る

「……ごめん、俺……」

「……？」

わからない

というような顔の彼女に

「今日…」と言えば
気にしてないと
小さく微笑み返して

「いいの、…」

「でも…俺が…」

「輝のせいじゃないよ」

「…カノン…違うよ…」

思い出すのも

辛いはずなのに

彼女は…

ずっと俺に微笑みかける

しかしその顔は

俺には辛いだけで…

—やめてくれ

—そんな顔は見たくない

—いつだって

—本物の笑顔で

— いてくれよ

気がつけば俺は
彼女を引き寄せ
肩に顔を押しつけるように
抱きしめていた

それに彼女は
驚いたように動かなくなり
やがて肩を震わせた

肩が濡れていく

感触がした

「お兄ちゃん…ッ」

【next】

濡れた、（後書き）

お久し振りですね
本当に

お久し振りですね

何週間経ったんでしょうか
二週位ですかね？

スイマセン：

でも今度は期末が近いです
殺す気ですよ

でわまた
次回

S
a
n
a

ヒーロー、**(前書き)**

今回は過去話です

S
a
n
a

ヒーロー、

【46】

|| || || || || || || ||

あれは、俺たちがまだ
5歳だった頃の話だ

俺とカノンは

玄関の前で

ワクワクしながら

あの人の帰りを待っていた

『輝、これ喜ぶかな？』

『絶対喜ぶよ!!』

——ガチャッ

『ただい…』

『お兄ちゃん！』

『おかえり！！』

——バツ

思いっきり抱きついた

子どもとはいえ

2人分の体重を

もろに受けたあの人は

一瞬倒れそうになったけど

俺たちを支えて

ニッコリと笑った

あの人

それは、カノンの兄ちゃん

『なんだよ2人して』

秀也^{シュウヤ}兄ちゃん

俺は秀兄が大好きだった
いつも俺と遊んでくれて
優しく微笑んでくれる

かっこいい俺のヒーロー

そして、

その日は特別な日だった

『秀兄!!』

『おたんじょーびおめでとー!!』

兄ちゃんの前に
カノンは花の冠
そして俺は手紙をだした

兄ちゃんは
驚きと嬉しさ、

両方が混ざった顔をして

『ありがとな』

そう言った。

そして俺とカノンを
優しく撫でてくれた

それが堪らなく嬉しくて

そして恥ずかしくて

誤魔化すために兄ちゃんにもう一度抱きついた

カノンも『ずるい』と言って、同時に抱きついた

ものすごく幸せだ

両親のいない俺に

姉ちゃんは親代わりになってくれて、
でも、バイトでほとんど家にはいなかった

そんな俺にカノンと秀兄は
まるで本当の家族みたいに接してくれた

それに今までお礼が言えなかった俺は
手紙にこれでもかと

『ありがとう』

そう書いたんだ

『輝、手紙は今読んでもいいのか?』

『え!?! 恥ずかしいから後でよんでよ!?!』

『なのかもききたい』

『だ、だめ!?!』

必死に止めようとした

だけど美倉家の2人はニヤリと笑った

『じゃあ、奈乃。あとで2人でようか』

『うん!』

『カノー!?!』

『あははっ』

そのまま三人で家で遊んでいればよかった?
手紙を今すぐ読んでと言えばよかった?

もしもあの時:

考えればキリはない

もしもなんて無駄なんだ

解っているけど
もしも、もしも、と考えてしまうんだ

『公園に行きたい』

公園に行きたいと思ったのは嘘だ
ただの照れ隠し
でも、カノンは
『行きたい』そう言った

秀兄はカバンと学ランを玄関に置き、立ち上がった

そして俺たちと手を繋ぎ
『いくか』
と言った

『…うん!』

|| || || || || || || ||

なにが、起こったんだっけ

気が付けば

目の前は真っ赤で

カノンはボロボロに泣いて

そして――――

|| || || || || || || ||

『2人ともあんまり走んなよー』

『秀兄はやくー!』

『輝まってよー』

照れ隠しなんて

すっかり忘れていた俺

ただ、純粹にはやく3人で遊びたくなった

公園につくと

カノンはトイレに行くと

行ってしまった

その間

俺と秀兄はベンチに並んで座っていた

『輝ーいきなりだけど』

『んー？』

『お前って、奈乃のこと……好きでしょ？』

『……………え？』

『あ、あたり？』

『な、なんでわかったの！？秀兄！！』

ベンチに立ち上がり
真っ赤になって叫んだ

すると秀兄は口元を緩め
ニヤニヤとしていた

『へえー…』

『か、カノンに絶対いわないでよ！！』

『はいはい』

『ぜったいだからね!!』

秀兄はもう一度

『はいはい』

と笑った

そんな返事で納得してしまった俺は
ゆっくりと座り直した

『…いつから?』

『…わかんない』

『そっか』

嘘ではなかった

気が付いたら好きだった

笑顔がしぐさが声が優しさが全部だ

全部が気が付いたら

好きになっていた

『でも、奈乃はなあ…』

『?』

『まだ、恋とかわかんないと思うよ?』

『…そうなの?』

声が掠れた

泣きそうになったんだ

『…じゃあ、おれはどうすればいいのかな…?』

『うん? そんなの決まってるだろう?』

え?、と顔を向ければ

俺の小さい額を

長い指で小さく

『コツン』と小突いた

びっくりした俺は

痛くもないのに
額を両手で抑えた

『…輝は、自分のやりたいようにすればいい』

『…』

『それだけ、分かった？』

『…うん!!』

『なにがわかったの？』

『か、カノン!？』

|| || || || || || ||

俺は泣かなかった

いや、泣けなかった

だって信じられない
嘘だ、嘘だ、嘘だ、

全部、全部が嘘だ

|| || || || || || ||

『ボール…』

『カノンあぶない!』

『まっ…!! 輝!! 奈乃!!』

・

———キキーツ

ド
ン
ツ

『秀兄…っ…!!』

―あれ？

―秀兄は赤い服をきてたんだっけ？

―秀兄はこんなに顔が青白かったっけ？

―秀兄はこんなに――

——冷たかったつけ？

|| || || || || || ||

秀兄は

右手に花の冠を

そしてポケットに、

もう開くことのない

すこし赤くなった

俺の手紙を、
入っていた

【next】

・

夏海、

【47】

||
||
||
||
||
||
||

「…る…輝…?」

「あ…だ、大丈夫?」

「…うん」

カノンは既に涙をこらえ、
心配するかのよう
に
俺の顔を覗き込んでいた

しかし、

その目は真っ赤に染まり

見るからかに辛そうで

苦しそうで

その辛さをずっと一人で

何年も何年も

抱えてきた

それでも笑顔を絶やさずに

誰にだって優しく

本当は自分が一番誰かに甘えたい筈なのに
それを隠していた

「…ごめん、カノン…」

悔しい

「…輝…？」

悔しい

「俺、…なんにも…」

どうして、
どうしてこんなにも
支えてやりたいのに

「…なにを…」

その力が
俺には、ないんだ

「輝…」

気が付いたら
カノンはまた
静かに、涙を流していた

「カノン…ごめ」

「、違うッ、」

「え…？」

「悔しくて…」

悔しい？

彼女が何を悔しがる？

「…素直に、素直に…受け止め、
られない自分が…、ツ悔しく…で、
」

そう言いながら
彼女はポロポロと
涙を溢している

「お兄、ちゃんはまだ、いない、
のにつ…なのに…、っ私…ッ」

肩を震わす彼女を見て
堪らなくなり
思わずその小さな肩を
抱き締めた

これで
何かが解決するわけでも、ないけれど
だけど…

「輝…だいじょう、ぶ…だから…離し…」

「嘘つき」

「嘘じゃ、ない…から」

「なんで？」

思わず口からでた
なぜだか、止められない

「え…？」

「なんで、俺には嘘つくの？、カノンが大丈夫じゃない事くらい…」

分かるんだ

だって俺だって、

大丈夫じゃないから

「カノンはいつも嘘ばかりだ。俺は信用できない？俺はダメ？」

「輝…」

止まらない

こんなこと

言いたい訳じゃない

…止められない

「俺が秀兄だったらよかった？俊哉だったらよかった？」

「輝…輝…！」

「秀兄じゃなくて、俺だったら、よかった？」

「なに、いつてるの…」

言葉の意味に

気が付いたのか、

カノンはゆっくりと体を放して、目を見開いた

「カノンは…自分で思うよりずっと強いよ」

「それは…」

「なのに俺は、自分で呆れるくらい、弱い」

「もう、いいよ…」

止まらない

「こんなに弱い」

止められない

「俺は、弱いのに…」

止まれ

「なんで残ったのが」

止まってくれ

「俺、なんだよ!!」

溢れた言葉と共に
涙が零れた

止まらない、

止まらない、

漆黒の闇に包まれた
月の光が反射した海

その浜辺に

俺の叫びが響いた

「、なんでだよ…!!」

「……ゴメン」

—————フワッ

「…カノ、ン…?」

「ゴメン…ごめんね…」

フワリと包まれた身体

彼女は聞こえないような

小さな声で

ひたすら、

謝り続けていた

でも、俺には

謝る意味が分からなくて

されるがままで

でも、何故だか安心して

自分でも

どうしたいか

わからなかった

この感情は勢いは

ゆっくりと

落ち着いた、

それでも目元の雫は

静かに、とまらなかった

「なんで、また謝るの…」

「…苦しいのは、分かっているのに…」

「…」

「なのに、…輝は…私ばかりよくしてくれて…」

「…そんなの…」

「当たり前なんかじゃない、輝だって私と同じくら苦しいのに…」

頭に回った腕の力が
少し弱まった

俺はゆっくりと放れ
彼女の顔をみた

彼女は泣きそうで、
でも、

口元に弧を描いていた

「それでも、輝はいつも私のそばに、
いてくれてたよね。」

「…うん。」

「だから……」

夏の海に

心地よい風が吹く

風当たりが気持ちいい

彼女はゆっくり立ち上がり
浜辺を歩きだした

少し進んだところで
振り向いた

フワリと笑う笑顔は
いつもの君だ

月の光と
その光に反射した
海のキラキラが

彼女の柔らかい髪に交じり
夏の静かな風が
それをなびかせる

とても、綺麗だ

「だから、ね？」

その続きを

聞きたくない

「輝、」

その

俺の大好きな

顔で

笑顔で

雰囲気で

「今まで、」

何かが

壊れそうだ

「ありがとう…。」

――切れた

気がつくと

勢いで立ち上がり

そのまま

裸足であることも忘れ

彼女の身体を包みこんだ

そして

「…輝?…ツ…!」

唇に暖かい感触

ほんの数秒だけど

何分もの

長い時のような気がした

何故、走り出して

何故、抱きしめて

何故、したのかは

わからない

わからないけれど

彼女の

「ありがとう」

を聞いた瞬間

あの言葉が聞こえた

気がしたんだ

『…輝は、自分のやりたいようにすればいい』

本当に

・

秀兄

・

・
俺は
・

これで

・

よかったの？

・

・

俺

・

わ
か
ん
な
い
よ

【n
e
x
t
】

・

ガキだから

夏海、（後書き）

うお、…

うお久し振りですウウウウウウウウ！！！！！

や、やっとテスト終わりました…。

色んな意味で…（死

最近よく忘れます。

え？

何をかって？

受験生の自覚です↑

そんな訳でこれから
どんどん更新率
低くなります…

頑張ります…
色んな意味で…

S
a
n
a

拒絶して、

【48】—奈side—

心地よい風
漆黒に染まる
海と、空

静かに音をたてる波

：今、何が起きている？

ただ、唇に暖かい感触
抱きしめられた温もり

目の前には
幼なじみの顔

…理解した時

”イヤだ”

…そうは思わなくて

ただ、この温もりを

もつと感じていたくて

背中に腕をまわして

ゆっくりと目を閉じた

「…ん…」

離れた唇は

まだその感触が残っている

そつと指で触れて

とたんに顔が熱くなる

目の前にあつた彼の顔は

暗く、沈んでいた

—何故、

—そんな顔をするの？

「…ごめん…」

離れた身体

彼はゆっくりと歩き出した

―何故、謝るの？

―悪いことをしたから？

―悪い事って？

―私に触れたこと？

頭の中で交差する

ぐるぐると旋回する

分からないことが多すぎて
訳が分からなくなる

いつの間にか

彼はどこにもいなくて

それがとてつもなく
私を不安にさせて

ぐちゃぐちゃになって
泣いた

「…わかんない…ッ、
わかん、ないよ…ッ」

泣いたら

また彼が来てくれる

気がしたから

|| || || || || || || ||
— 輝side —

「ハアツ…」

———ザツ

自然と足が進む
段々と速くなる

「訳わかんねえ…」

自分の行動が、

彼女の行動が、

自分で自分が
わからなかった

あんな事をすれば
拒絶されると
分かっていた筈だ

なら何故？

彼女は拒絶しなかった
俺を受け止めた

それはどうしてだ

こんなグズグズとした
感情を捨てたかったから、
だから
拒絶されるようなことを
したのに…

なのに彼女は、

俺を受け止め、た

それはどうしてなんだよ
余計に分からなくなる

彼女が好きなのは

俺じゃない
アイツなのに、
なのに、

もしかしたら
なんて自惚れている

ダメだ

俺じゃ、
ダメなんだ

いっその事
拒絶してほしかった

いっその事
嫌ってほしかった

そうすれば
こんな感情捨てられた

余計に膨らむ
”好き”という感情は、
どうやっても

俺の中から

出ていくことは

ないんだ

決して

【next】

聞き、

【49】—奈side—

——ガチャ

「!! 奈乃香!!」

「…えっと…わっ!？」

扉を開けて

なんと言いつくするか

考えようとした瞬間

急に華が抱き着いてきた

「し、し、心配したんだからあ……!!」

「ごめんなさい…」

標準語になっている

そんな彼女をみて

本当に心配してくれたんだなと、感じた

半泣きの華に抱きしめられている私に

深井君はそっと近付いて

「どうしたの？」

そう聞いてきた

その質問の意味がわからなくて、首を傾げた
すると、

「泣きアトがある」

そう言って

私の目元に触れた

それにまた泣きそうになる

今、優しくされる事が、
凄く辛い

「だ、大丈夫！海水がちょっと目に入っちゃっただけだから！！」

「…そう」

深井君はホッとしたような
気に入らないような
複雑な顔をした

そして

まだ私に抱き着く華を見て
鬱陶しそうな顔をする

「華…もう大丈夫だから」

「、うん…あ」

「どしたの？」

華は思い出したように

後ろを向き

私はその目線の先を見た

そこには

「輝も心配してた、走って奈乃香探しに行った。会わなかった?」

そこにいた彼は

一瞬目を見開き

そしてゆっくりと椅子から立ち上がり

歩いてきた

「大丈夫だった?」

それは

何事も

なかったかのような声で

その小さな微笑みの奥に

彼は見えなかった

「…ん、」

|| || || || || || ||

最終日の朝

二日間お世話になったこの別荘ともお別れの日
帰るため荷物をまとめる

ーコンコン

「はーい？」

——ガチャ

「…どしたの？」

そこにいたのは輝

輝は彼らしくない
笑顔をうかべて

「もう行くって」

「あ、うん。」

急いで支度を進める
気を使ってくれた輝は
その場で待っていてくれる

でも、今の輝が
側にいるのが
なんとなく嫌だった

「輝、早めに終わらすから先に行ってて」

「…うん、じゃあ行くね」

そう言って

部屋からでて、
扉を閉める寸前に

「あとでね、

・

奈乃香。」

「え……？」

聞こえた言葉が

なんだか信じられなくて
聞こえた方を見た
だけど、そこには
既に閉じられた扉だけ

「聞き間違え…」

そう呟いて
目の前の荷物だけに
集中した

|| || || || || || || ||

「じゃあ、美倉サン」

「うん、ありがとう。またね深井君」

「ついでにお二人も」

「…一言余計」

「ひどいなあ亮輔は」

初日に待ち合わせた駅で下ろしてもらい
そこから三人で帰った

途中から華とは道が違う

「じゃあ、また」

「うん、じゃあね」

「またな、華さん」

そこから私の家まで
輝はずっと喋っていてくれていたけど
話しているのが輝なのに
輝じゃなくて
心地悪かった

「送ってくれてありがとう。またね」

「うん、また」

手をふって

家の扉を開ける

そして扉がしまる

その時

「やっぱりダメだ…ゴメン…カノン…いや、” 奈乃香”」

「ッ!？」

振り返った時

やっぱり目の前は

閉じられた扉

家は静かで

親はまだ帰ってないようだ

なにも考えられなくて

ゆっくり二階に上がって

ゆっくりと自室に入る

ふと携帯のランプが青くチカチカと光っていた

開けると

メールが一件

『おかえり

楽しかった?』

それは俊哉から

その1文で

今まで考えなかった

全ての事が

全ての感情が溢れた

雫となって

震える指で

ボタンを押そうとした

けど、

なんて書けばいい?

『楽しかったよ』

そう返せばいいのに

わかってるのに

書けなくて

楽しかったよりも

沢山の感情があって

考えれば考えるほど
分からなくなる

「…ッ…なんで…」

呼んで、

呼んでよ、

いつもみたいに、

ちよつと照れたように、

『久しぶり』

『あははっ』

『変わらないなあ』

『ゴメン…奈乃香』

『カノンは』

それは聞き間違え

・

そうあって欲しかった

【next】

・

また分からなくなる

・

凶星、（前書き）

お久しぶりです

凶星、

【50】I 俊 side I

いつも、あまり
いじる事のない携帯

1日に何度か光る
その青いランプは

何日か光ることはない

思えば

最後にメールした相手は
誰でもない奈乃香だった

奈乃香は三日間、亮輔の別荘へ遊びに行っていた
その最終日の夕方

俺は奈乃香にメールをした
たった一文

『楽しかった？』

それだけ
彼女のことだから
素直に

『楽しかったよ』と、
返ってくると思っていた

が、楽しみにしたまま
3日がたったいた

「いい加減おそいよなあ」

何か、あったのだろうか

急に言い知れない
不安を感じた

：こうなったら

「思いきって…」

携帯をとり

いつものように

アドレス帳を開いた

しかし

いつものように

メールマークは押さず

通話ボタンを押した

聞きなれない

電子音が鼓膜を振るわす

すぐにはその音は切れない

だが、1分ほどたった頃だろうか

電子音が切れて

1ヶ月聞いていなかった

愛しい声が聞こえてきた

『…と、しゃ?』

「ああ、久しぶり」

少しの沈黙

声が聞こえたことで、何かあったのか
という不安は消えた

だけど、一瞬の言葉に
自分の名前が聞こえた
その一瞬に

また、違う不安が襲う

『……えっと……どうしたの……?』

「え、あ、メールが、」

『……うん、』

まただ、

また、なにか抱えているような、そんな声

『ごめんねメールかえせな

「なんかあった？」

え…?…』

あ、凶星だ

『な、なんにもないよ』

なんで
嘘をつく？

俺には
奈乃香の事
全部、わかる
…はずだから

でも
いま、俺の中にある
予想は

当たってなど欲しくない

そう

願うだけだ

微かな希望を胸に
一言もらす

「…三上…?…」

『……ッ』

また、だ

またアイツだ

いつだってそうだ

奈乃香を

嬉しそうな

悲しそうな

切なそうな

楽しそうな

そんな顔にするのは

いつだって
俺じゃないんだ

「また、新学期に」

『え、俊…プツ、…ツ…ツ…ツ…』

俺には

ダメなんだ

なら、俺はどうする？

「…よしっ」

新たな決意を胸に
携帯を閉じた

【next】

偽物、

【51】 — 奈 s i d e —

終わって欲しくなかった
夏休みは、
無残にも終わりを迎え

新学期初日の朝は
憂鬱な気分が始まった

カーテンをあけると
まだ暑さがのこる
太陽が上がった爽やかな朝

「はあ…」

ネクタイを締めようとするけれど、
自然とその動作が
ゆっくりになる

なるべくゆっくりと
学校に行くのを遅らせる

それでも時間は
止まってはくれない

「行ってくるね…」

玄関をでると
新学期を感じる匂いがする

久しぶりの感覚
久しぶりの風景

ただその道のを歩く
一步一步は重かった

気が付けば
自分のクラスの前

ふと左側に目をやれば
彼のクラスが見える
笑い声が響くその場所の
中心には彼がいるんだろう
それを気にしないように
大げさに扉をあけて
大げさに

「おはよう」

と言った

『こんにちは。お昼の放送の時間です。今日の曲は……………』

校内に響き渡る放送
それをなんとなく耳に入れながら、

お弁当に箸をのばす

——ザアア……

屋上に吹く穏やかな風は
夏休みの時のような
ぬるさはもう少なく

その風は
季節の変わり目を知らせる

今日はなんとなく
屋上で食べようと思った
華は新学期早々に熱を出したらしく休み

一緒に食べようと
声をかけてくれた子もいた

だけど、なんだか
楽しく皆でおしゃべりしながら、なんて
そんな気分じゃなかった。

だから断って、
一人でここに来た

「あ、これ華の好きな曲だ…。」

「へえ、アイツこんな渋い曲すきなんだ。」

「ふ、深井くん!？」

声はした、

のに姿が見当たらない
すると頭上から

「こっちこっち、」
と声が聞こえた

素直に上に顔を向けると
片手にパンをもった
深井くんがもう片方の手を
ヒラヒラと振っていた

「な、なにして…」

「ん、ここ俺の指定席なんだよね、知ってた？」

「そ、そうなんだ…」

「うん」と一言かえして
またパンをひとかじり
遠くの空を見ていた

私はまた目線を落とした

深井くんの指定席
そこは…

「なんてのは嘘」

「……………え？」

「美倉サン元気ないし、どうしたのかなと思った」

「ど、どうもしないよ?」

誤魔化して笑うと

また深井くんは気に入らない様な顔をした

ため息を漏らしながら

またパンをかじる

「嘘をつかれるのは嫌いなんだよ。」

「……………!!」

その言葉は

浜辺で聞いた彼の言葉と重なって聞こえた

―嘘をつかないで、

―俺には、

―本当の君でいて、

そう伝えてくれた彼は

今、本当の彼なのだろうか

「さしずめ、原因はここを指定席としている奴」

「…敵わないよ、深井くんには、」

小さく笑いながら
顔をあげた

するとそこには
柔らかに笑う顔がある

深井くんは
ゆっくりと降りてきた
そして私の隣に座った

「まあ、細かい事は聞かないけどさ、あんまり一人で抱えこまない方がいいよ。美倉サン」

「うん。ありがとう」

「そうゆう人はバカ食いして太るのがオチだからさ」
と笑った深井くんに
一言余計だといえば

彼は「そっか」、
と口元だけ笑った横顔で
ガサガサと袋をあさった

「新発売、美倉サンも食べる？今日は毒味役がないから一緒に食べよ」

「毒味役が？」

クスクスと笑えば
屋上にまた風が吹いた

少し

秋の香りがした気がした

――
――
――

お昼がすぎて
午後の授業も全て終わった

「さ、帰ろかな。」

何人かのクラスメイトと挨拶を交わして、
鞆を肩にかけ教室を出た

「おい押すな！」

声がしたと思ったら
目の前には
見慣れた彼の顔

一瞬そらそうとも思った
けど、

「あ……………」

「あっ…と…バ、イバイ」

「うん、バイバイ」

淡々と済ました挨拶
そしてそのまま廊下を歩く

校舎をでて
校門をでて

一番最初の横断歩道

そこの赤信号で足を止めた

（ああ、そうか）

私は

彼の姿を見たくなかった訳じゃなく、

彼に会いたくなかった訳でめなく、

ただ、ただ

（私を映したあの瞳が）

見たくなかったんだ

【next】

（だって）

（彼の瞳に映る私は）

（本物じゃなかったから）

準備室で、？

朝は
意外と爽やかに迎えた

【52】

「奈乃、遅刻するわよ」

「はい」

鏡の前で入念にチェックした前髪は完璧
制服にシワは見当たらない

鞆を持ち

部屋の扉を開けた

「あ：行ってきます、お兄ちゃん」

――――。パタン

新学期から一週間が過ぎた

あれからは私は普通に輝と話せるようになった
話す、といっても

少し挨拶を交わす程度

軽く頭を下げて

「おはよう」

「じゃあね」

そう言うだけ

言うだけなんだ

私は決して目を見なかった

きっと輝もそうだろう

でも、それを確かめることはできない

理由なんて
考えたくもない

「奈々乃香!」

「華!おはよう、熱下がったんだね、よかった」

そう言って笑うと

華は不思議そうに首を傾げている
私もそれに首を傾げる

「…華?」

「奈々乃香、」

そうして開きかけた言葉
しかし、華は
首を横にふって
なんでもない
と
笑って言った

「遅刻するで!!」

「あ、うん! 待って」

――
――
――

授業も残り半分になった

次の時間は国語だ

いつものように

国語準備室にむかう

そのために

立ち上がった

「奈乃香、どっか行くん? もうあと10分で授業始まるで?」

「私、係だし、さっき集めた宿題も出さなきゃ」

「……………宿題?」

その顔は…

華は急いで自分の席に戻ってノートを取り出している

完全にわすれていたようだ

「頑張って」と一言残して
教室をでた

――コンコン

「失礼しまあす…」

古く重い扉を開けて

ゆっくりと頭だけ入れる

少し埃っぽい準備室は

古い本や資料が沢山

またこの中に先生は埋もれているのだろう

「先生？どこですか？」

キヨロキヨロと探す

すると足元から

『ガサ…』

と小さな音がした

今日はここかと

目の前の本の山を見た

明らかに下の方がモソモソと動いている

「大丈夫ですか？」

一つずつ本をどけていく
すると中からでてきた
その人物は予想外の人で

「ぶはっ！」

「み、海晴!？」

急いで他の本もどけた

「あー死ぬかと思った…」

「どうしてこんな所…」

海晴は立ち上がると
制服についた埃を払う
そして私を見た

「え？…ああ、越後先生が出張でいないからって準備室の整理頼まれたのよ。まったく…そのせいでボロボロよ…最悪だわ」

「はあ…」と
ため息をついた

越後先生が出張…って

「ええ！？」

「な、なによ」

「私…国語係で…」

「あら、つまり無駄足だったってこと？」

こくりと頷くと

頭上から鼻で笑っている

海晴の声がした

「じゃあ…自習かなあ…帰って皆に伝えないと…」

「じゃあ、早くいった方がいいわよ。ほら」

そう言って

腕時計をみせてきた

それを覗くと

残り3分

「あ、じゃあ行くね。海晴は？授業」

「いいのよ、ここにいて伝えてあるから」

ふふ、と静かに笑う

そんな海晴は同じ年であることが何かの間違えなんじゃないかと思えた

「じゃね、」

また古く重い扉に手をかけ
ゆっくりと開けた

静かに閉めて
廊下を走った

「奈乃香ちゃんは、いい娘だね…」

――
――
教室に帰って

自習の事を伝えると

皆、飛んで跳ねて喜んだ

「自習か…奈乃香！じゃあ喋って…」

「華は宿題をおわらせるんでしょ？」

「……………はい」

宿題を教えていると

俊哉が近くに寄ってきた

「なんやの俊哉？」

「奈乃香」

「おい無視か私は無視か」

「…なに？」

俊哉はニツコリと笑った
そして一言

「デート、しない？」

【next】

準備室で、？

【53】

「デートしよう」

「デ？」

「…デ？」

「「デートおお！！？」」

クラスに叫び声が響いた
それもそのはず

いつも優しくてどちらかと言うと謙虚な俊哉が

周りを気にもせず私をデートに誘ったんだから

「奈乃香？」

「へ！あ、うん…」

「じゃあまたメールする」

それだけ言うと俊哉はすぐに席に戻った

そして勉強を始めた

周りが啞然とする中、華が私の肩を揺すりながら

「よかったなあ奈乃香」

ニコニコする華

私はそれに少し笑った

すると、彼女は

あの日屋上でしたように

不思議そうな顔をした

「なんで…?」

「華…?」

そして悲しそうな顔をする

その理由^{ワケ}が、

私には、解らなかった

…放課後

「奈乃香、ホンマに一人で平気?」

「平気だよ」

私は先生に頼まれた書類の整理をするために
授業がおわり残ることに

一人でもどうにかなりそうだから

華には帰ってもらった

華は最後まで複雑そうな顔をしていた

「先生、」

「ああ、美倉さん。ごめんね急に」

「いいえ、私は何をすればいいんですか？」

「ええと…」

――

――

――

私が向かったのは

国語準備室

そこに越後先生が間違えて持っていた大切な資料を持ってくるように頼まれた

「どこだろう…」

相変わらず散らかっているけれど、海晴が掃除したのだろう
埃っぽさはなくなっていて
本も少しずつではあるけれど、片付いていた

「あ、これかな？」

手に取った紙束は少しザラザラしていた
でも破れているところは見当たらない
安堵の息を漏らす
すると：

—ゴソツ：

何か物が動くような音が足元から聞こえた
そちらに目を向けると

手。：手？

「…海晴ッ！？」

「…た…たすけ…て」

急いで山から海晴をひっぱりだす
海晴は涙目で肩で息をしている

「死ぬかと…思った…」

「だ、大丈夫？」

手を伸ばすと

海晴は力弱く私の手を掴んでゆっくりと立ち上がった

「ありがとう…」

「まだやってたの？」

「量が多いのよ…」

溜め息をつきながら制服についた埃をはらう海晴
私はそれを見て、なんだか放っておけなかった

「…私も手伝おうか？」

「……………」

海晴は驚いた顔をして
私の顔をみた
そして少し笑って

「いいわよ、このぐらい一人でできるわ」

「でも…」

「奈乃香ちゃんだって用があつたんじゃないの？」

「……………あー!!」

海晴はクスクスと笑い

「じゃあね」

と言い、小さく手をふつた
私もそれに

「うん、またね」

と言って準備室を出た

――ブー、ブー、ブー…

「あら？メールかしら…」

――ガラッピシャツ…

廊下から見える空は
すっかり茜色に染まり
生徒の影は少ない

遅くなってしまい
どう先生に言い訳しようかと迷っていたが

『準備室散らかってたでしよう？よく見つけたわね、ありがとう』

と言われて拍子抜けした
もう遅いから帰りなさいといわれ急いで教室に戻り
鞆を持って廊下に出た

「……………」

下駄箱につき

靴に手をかけた

真っ直ぐ帰ろうと思っていたけれど、どうも気になっていた
鞆をその場に置き、上履きに履き替えた

「やっぱり一人であの量は無理だよね…」

国語準備室に向かった

準備室の明かりはまだついていて

やはり終わらせるのは無理だったのだろう

扉に手をかけようとしたのと全く同時に

——ガラッ！

「わっ!!」

そこからでてきたのは
少し焦ったような顔をした海晴だった

「奈乃香ちゃん…どうしたの…?」

「えっ…と、やっぱり手伝おうと思って…」

「もう終わったわよ」

「あ、そなんだ…」

中を覗くと

確かに綺麗に揃った本棚

準備室がここまで広がったかを初めて知った

少しの沈黙

耐えきれなくなった私は

「じゃあ…帰るね」

と準備室をあとにしようとした

しかしそれは制された

「…海晴…?」

海晴が私の手首を掴んでいたんだ
すると海晴は

「…俊哉が奈乃香ちゃんをデートに誘ったって…」

「え、あ、うん…」

また海晴から止めるように言われるかと思い
待ち構えていた
でも、聞こえてきた言葉は

予想外すぎた言葉

「奈乃香ちゃんは…それでいいの?」

「……………え?」

「今の奈乃香ちゃんは、無理してるようにしか、見えない、から…」

無理してる？

私が？なんで？

その言葉の意味がわからなくて、わからないのに

―それでいい訳、ない

そう、思ってたんだ

|| || || || || ||

帰り道、

すっかり暗くなっただいつもの道を歩く

何故か妙に海晴の言葉が頭から離れなくて

何故か妙に寂しくなった

寂しくなった時

いつも誰が隣にいたか

それがわからなくて

寂しくなった

空に輝く星は綺麗なのに

その隣がないと

その綺麗さが心に突き刺さるようだった

何故だか、頬に何か暖かいものを感じた

―誰だっけ……

鞆の中で携帯が静かに震えているのに
気付かないでいる私は

本当に自分なのだろうか

【NEXT】

壊していく、

【54】

例えば、

今までのことが全部夢で

例えば、

今までの感情は全部幻想で——

そんな事を考え出したら

きりが無い

そう、だって

所詮、『例えば』は『例えば』でしかなくて

それが本当になることなんて、ほとんどない

そして私の『例えば』は

どうあがいたって『例えば』でしかなくて

過ぎたことはどうしようもないんだ

「…………あと5分」

あの日、あの場所で
海晴に言われた言葉は
記憶だけでなく
心の奥底まで根を張り
消えることはなかった

このままでいい訳ない
でも、それをどうにかしようとしてしまう事が
どうしようもなく怖くて
私は何もできないまま
このまま時が流れていくのを
待つだけになってしまっただろうか…

「はぁ…」

ため息を一つこぼしたその時
ザッザッ、
と誰かが走ってくる音
そちらを振り向けば
待っていたその人だった

「…ハア、ごめん、まった？」
「ううん、全然」

俊哉は息を切らしていた
いつも何事も計画的にこなす俊哉が
遅刻気味で走ってきたのが
珍しくて首をかしげると
それに気が付いたのか

「ハハ」

と一つ笑みをこぼして
私に言った

「昨日、なかなか眠れなくてさ、柄にもなく緊張しちゃって…」
「緊張？」

「奈乃香は、しない？」
「…いや！そんなことはないけど！その、うん！」

緊張、というか
確かに昨日の夜は眠れなかった、
と、いうより
寝た気がしなかった

考え事をしていたから
ただ、それは

俊哉とのことではなかった

それがなんだか申し訳なくて
あわてて、ごまかそうとしたら

また俊哉は笑った

「いつもの奈乃香だ」
 と言って

いつも？

そっか、これがいつもの私なんだ

[illegible]

心ここに非ずのまま歩き
目の前には

「遊園地？」

「そう、クラスで行くとか騒いでたろ？　ここらしいけど、奈乃香と二人で来たくてさ」

照れくさそうに
頭をかきながら
そういう俊哉に嬉しくなった

そういえば

いつの間にか繋がれている右手

気が付かなかった私は

それほどまでにボーっとしていたのだろうか

以前の私なら

少し手が触れただけで

真っ赤になっていたのに

(なんで…?)

なんで、なんて

こたえはもうわかっていた

俊哉はもう私の心にいない

いや、俊哉が私の心にいたのは
一瞬で、

「いこう」

「…うん！」

それでも今日だけは

このまま過ごして

最後に言おうと決めていた

最後の言葉を、

|| || || || || || || ||

夕方になってきた
空も茜色に染まる

その景色を一望できる
人々はそれ見たさにここに集まる

「…観覧車」

真下からじゃってっぺんが見えなくて
首が痛くなるだけ

向かってくる一つの
小さな箱に二人で乗り込む

「俊哉、今日はありがとう」

「いいんだ、楽しかったよ」

笑顔で答える俊哉に
少しの罪悪感で胸が痛くなった

今日は本当に楽しかった

最近悩んでいたせいかな

こうして思い切り遊べなかったから…

だからこの沈黙が

少しだけ辛い

——本当にここで終わらせていいのだろうか？——

俊哉と過ごすのは楽しくて

何も苦しくなんかない

だったら

むしろこのまま

何も話さずに

俊哉といることを選べば…

夕焼けに染まる街並みと

俊哉の横顔が

私の考えを壊していく

——けれど

——本当にそれで

——いいの？

ふと、茜色の景色が目の前で暗くなった
ハッとすると

そこには俊哉の顔があった

「と、俊哉…？」

「知ってる？ここの観覧車でキスすると永遠に2人でいられるって」

「え？あ、あの…」

「ベタだよね、でもそういうのは…」

二人の影が重なるうとする…
ゆっくと

「なんだか、信じたくなるんだ」

——脳裏に浮かぶ貴方に聞きたい

私はどうすればいい？

【next】

教えてよ

瞳に、

【55】

・
ゆつくりと

でもそれは確実に
近づいてくる

ほんの2、3秒の出来事が
何分にも、
何時間にも感じる

この瞬間が過ぎれば
一体どうなってしまう？

ずっとこの人という？

このまま
なにもなかったかのように
平然と毎日を送るの？

「…奈乃香？」

あと少しで重なる、
そんな瞬間に

私はゆっくりと
彼の肩を押した

「…ごめん」

この時が来るのは
私が、私自身で決めたこと

なのに、気持ち揺れる
このままでいたい
でも、それじゃ…

「ダメなの…」

まっすぐ

貴方の瞳をみて伝えたい

優しさを教えてくれた瞳

高鳴る気持ちを教えてくれた瞳

好きという気持ちを教えてくれた、瞳

そんな瞳が大好きで、

大好きで…

でも、それよりも

優しくて、それよりなにより

暖かいあの瞳に

吸い込まれてしまった

だから、この瞳とは

お別れ、するんだ…

「私、俊哉のこと好きだった」

やめて、

そんな悲しそうな瞳

そんな瞳にお別れしたいわけじゃないのに

「でも、もう…」

——ガタッ

「あ、もう着いた、降りようか」

「え？、あ、俊哉、あの…」

どうして？

どうして言わせてくれないの？

どうして…そんなこと解ってる

それほどまでに俊哉は

私のことを大事にしてくれていた

その証拠だ

「…っ俊哉！」

けれど…

言わなきゃいけないの

「私、私は…ッ！！」

まっすぐに見れば

ふわりと微笑む俊哉

その瞳にまた揺らぐ

―何を迷っているの？

―もう決めたのに

―また、私は迷う

その瞳に翻弄される

私の心

頭ではわかってる

このままじゃダメだってこと

誰も幸せになれないってこと

「迷ってる」

「え…？」

顔を向ければ

今度は困ったような顔

「知ってたんだ、奈乃香がもう、俺を好きじゃないってこと

だから、今日で最後にしようと思ってた

でも、もしかしたら…なんて考えて…」

その困った顔は

さっきまでの私とおんなじ

どうすればいいのかわからない顔

わかってる

私はわかってるよだから…でも…

頭ではわかってるのに

—どうすればいい？

「でもさ、俺、決めたんだ

やっぱり奈乃香は俺じゃなくて

アイツといたほうが笑ってる…だから…」

最後の俊哉の瞳は

私の好きだった

優しい、瞳だった

「バイバイ」

やっと

お別れできたね

——トンッ

背中を押され

そのまま歩きだす

決して振り返らないで…

気が付けば頬には

暖かいものが流れていた

それは収まらず

増していくばかりだった

「う…ううう…うわああ…」

それを飛ばしてしまえ

走れ

走れ

もっと、もっと

走れ

走れ

「…ありがとう…バイバイ」

大好きだった人

【next】

無性に、

【56】

「…っ…ひっく…」

止まらない涙
けれど立ち止まらない

今、止まってもダメだから

走ろうか？

そうすれば涙は消える

でも、私にはまだ
走り出す勇気がなかった

だから、ゆっくりと
一步一步進んでいく

涙が止まることはないけれど
進まなければならないから…

「…っ…く…」

涙が少なくなっていく
最後の一滴を指でなぞる
すると、その時だった

「…奈乃香？」

「……………輝？」

そこに立っていたのは
紛れもない、輝だった

「泣いてるの…？」

「え、あ、違うの…これは…」

「……」

「…え？」

そつと静かに握られた右手
それに対する疑問をぶつける暇もなく
強い力で引っ張られた

ずんずんと歩くその道は
私の家への帰り道

昔はこうして
手をつないで
二人で家に帰ったな…

「今日……」

声のしたほうを向いた、
…けれどやっぱり背中

「…なに？」

「…俊哉と、遊びにいったんじゃ…」

「……………うん…」

知られてたんだ…

おそらく華が口を滑らしたんだろう

知られたくなっかた

そう思うと

胸がキュ…と締め付けられる

「…楽しかった？」

「……………」

その質問はどういう意味なんだろうか
素直に楽しかったか聞いているだけ？

楽しかった

そう言えればいいのだろうか

「楽しかったよ」

「そっか、そうだよな…」

少し悲しそうな顔をする輝に

切なさと同時に
ちよつとした自惚れを感じていた

「……………」

しかし、それは一瞬で消えた
繋がれた手を少し強めてみたけれど
その手は握り返されることはなかった

また、胸がひとつ締め付けられる

ほんの少しの沈黙

涙ももう、とっくに消えていた

「…ついたよ」

「へ？あ、」

いつの間にか

もう私の家の前まで来ていた

少し驚いた私が

呆然と家を見つめていると

「…フツ…」

と小さく隣から笑い声が聞こえた
輝が小さく笑っている

楽しそうに

私を見て

私の

隣で

「やっぱなあ…奈乃香だ」

違う

「奈乃香？」

違うよ輝

違う、違うの

私は奈乃香だけど
でも、違うの…

「奈乃香？どうしたの？」

気が付くと

乾いていたものが再び流れてきた

それに触れる

彼の指が

暖かくもあ、冷たくもあつた

——近くて、でも遠い

「輝…てる…っ」

「うん、ここにいる。どうした？」

「私…わたしは…ッ…」

胸に秘めるこの想いが
涙とともに溢れてくる

「…好き…好き、なの…ッ」

届け、届けと

必至で「好き」と繰り返す

涙で見えないけれど

触れている彼の指先から

輝は戸惑っているんだと解る

「…奈乃香、落ち着いて…」

「…好き…なのに…輝、が…ッ」

解ってる

これが彼を困らせるだけだと
解ってる

…けど、とまらないんだ

「…あんな、俊哉が好きだった、のに…ッ」

「・・・」

一瞬、輝の指が止まった

そしてその手は

私の肩へと移り

そっと家へと促していく

「…輝…？」

「ごめんね、」

ゆっくりと扉がしまる

全部が

彼との全てが遠くなる気がする

「奈乃香」

――ボタン

「……ッうああ……」

流れる涙

また涙をながせば
輝が来てくれると信じていた
いつも

そばにいた輝は
どんな時でも

私の涙を拭ってくれた

これからも

それが続くと

当たり前のように思っていた

「…輝ッ…輝ッ…」

最後まで

私は彼にとっての

『奈乃香』でしかなくて

それが無性に嫌で、嫌で

私は、やっぱり

輝のことが、好きなんだ

「……………」

秀也兄ちゃん

俺はこれでよかったのかな

彼女を

秀兄の大切な彼女を

泣かしてしまった

できればあのまま

この手であの肩を抱きしめたかった

この口で

彼女のことを呼んであげたかった

でも…

「俺は…『幼馴染』でいるのが…」

（最後まで）

（君にとっての輝で）

（貴方にとってのカノンで）

（いたかった）

でもそれは

叶わないことなんだ

「ごめん…『カノン』」

「……ッ……呼んでよ……」

【next】

決めた、

【57】

暑かった夏は去りかけ
秋風が吹くようになってきた

爽やかな風とは裏腹に
私の気持ちは淀んでいた

放課後の教室
そこは私と華だけがいる

「奈乃香?…具合でも悪いんか…?」

私の顔を心配そうに覗く華

それに私は

なるべく笑って返す

納得してないその顔は

私の嘘に気が付いてる証拠

「大丈夫だよ…」

どうしても弱弱しくなってしまう

華は黙って優しく

私の頭をなでる

それに胸のあたりが締め付けられて

勢いで華に抱き着いた

すると華は

抱きしめ返してくれた

頭を撫でていた手を背中にまわして

「……………」

自分が悪く考えすぎてるって
そんなことはわかってる

わかってるけれど
どうしようもない

怖い、怖い、怖い、こわい

怖くて、それに立ち向かうのも怖くて
私は怖がりだから

だから、…

決めたよ、どうするか

||||||||||||||||||||

『それでいいの?』

『いいよ、』

||||||||||||||||

「明日はついに遠足だからな! 遅刻すんなよお前ら!」

「せんせーサボっていいですかあ」

深井くんがダルそうにそういう

「ダメに決まってるんだろ？俺もできることなら家にいたい、娘とあそんでいたいかな」

「なんやねん、このダメ教師」

「せんせーこの女がせんせーのことダメ教師とかいってまーす」

「何いうとんねや！！亮輔！！」

「うーわー殺されるー、助けて美倉サンー…？」

私の後ろに隠れた深井君が不思議そうな顔をしている
その顔に笑顔で返す

すると不思議そうな顔だった深井君は
一気に不機嫌になった

「ふ、深井君？」

「……なんでもないよ」

「で、でも…」

「また今度言う…」

そう言って席に戻る深井君

「……？」

明日…

ついに明日は遊園地へ向かう
あの場所へ

明日、明日

決めたからね
大丈夫

『その先に待っているものは』

(終止符の『。』か)
(続いていく『、』か)

【next】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3509j/>

キミがくれた

2011年10月6日13時55分発行